

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所
理論・構造研究系 領域指定型プロジェクト

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約

Linguistic Variations within the Confines of Language Faculty

日本語獲得に基づく実証的研究

Studies in the Acquisition of Japanese and Parametric Syntax

成果報告書 II

プロジェクトリーダー:	村杉 恵子	(Keiko Murasugi)	
プロジェクトメンバー:	窪菌 晴夫	(Haruo Kubozono)	(2010-2013)
	斎藤 衛	(Mamoru Saito)	(2010-2013)
	杉崎 鉦司	(Koji Sugisaki)	(2010-2013)
	岸本 秀樹	(Hideki Kishimoto)	(2010-2013)
	高橋 大厚	(Daiko Takahashi)	(2010-2013)
	高野 祐二	(Yuji Takano)	(2013)
	瀧田 健介	(Kensuke Takita)	(2013)
	多田 浩章	(Hiroaki Tada)	(2013)
	藤井 友比呂	(Tomohiro Fujii)	(2013)
	宮本 陽一	(Yoichi Miyamoto)	(2013)

2013年9月

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約
日本語獲得に基づく実証的研究
成果報告書 II

目次

はしがき.....	i
村杉 恵子 (南山大学)	
1. 日本語文法を特徴付けるパラメーター再考.....	1
齋藤 衛 (南山大学)	
2. 主語・目的語省略の比較統語論.....	31
高橋 大厚 (東北大学)	
3. 動詞の自他と分裂動詞句分析.....	53
岸本 秀樹 (神戸大学)	
4. 付加詞と文の階層構造.....	69
岸本 秀樹 (神戸大学)	
5. 言語獲得からみる移動操作:かき混ぜ.....	85
村杉 恵子 (南山大学)、杉崎 鉦司 (三重大学)	
6. 日本語における <i>wh</i> 島制約の獲得:予備的研究.....	105
杉崎 鉦司 (三重大学)、村杉 恵子 (南山大学)	
7. 言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく実証的研究.....	117
村杉 恵子 (南山大学)	

はしがき

国立国語研究所 理論・構造研究系領域指定型プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」は、現代言語理論を背景にして、統語理論研究の成果を検討し、発展させた上で、文法の普遍的属性を反映していると考えられる日本語の獲得過程を実証的に分析することを目的としている。

本報告書は、国立国語研究所、南山大学、神戸大学において研究会・ワークショップを重ね、発展させてきた成果の一部を、日本語で纏めるものである。ここでの執筆者は2010・2011年から共に研究を進めてきた五名（斎藤衛、岸本秀樹、高橋大厚、杉崎鉦司、村杉恵子）によるものであるが、本報告書を基に、今後理論と実証の関連を深める予定である。

本プロジェクトは、理論・構造研究系長 窪菌晴夫氏の下で活動を行ってきた結果、大きく三つの成果をまとめている。この報告書とは別に、英語による報告書(発行済み)と、南山大学大学院人間文化研究科研修生 中谷(村井)友美が中心となってまとめた日本語を母語とする幼児のデータベースを作成している。また、2013年には、新たに理論言語学と言語獲得理論に精通する五名（多田浩章、高野祐二、宮本陽一、藤井友比呂、瀧田健介）が加わり、本プロジェクトの研究の層は広く厚くなりつつある。

短い期間の中で、このプロジェクト研究を進めることができたことは、国立国語研究所所長 影山太郎氏、理論・構造研究系長 窪菌晴夫氏をはじめとした国立国語研究所の先生方、そして高山和男氏、米田純子氏をはじめとした事務職員の皆様のお支えと励ましによるものである。この場をお借りして、深く感謝する。

また、それぞれの時間の中で自らの研究を進め、お互いの研究について親身になって考え、そして心の通じあう時を共にしてくださったプロジェクトのメンバーの皆様、南山大学言語学研究センター、南山大学大学院人間文化研究科の大学院生と研修生の皆様に、この機会をお借りして、心から感謝する。

研究が、お互いへの友情と尊敬で結ばれ遂行されたことも、このプロジェクトの成果であった。東北地方太平洋沖地震直後には、南山大学にて研究会が開催され、皆で『同じ釜』を囲んで励ましあったこともあった。南山大学言語学研究センター資料室にて集まり、皆で国語研プロジェクトを一緒に推し進めていこうと話合ったのは2013年春も梅の花の咲くころのことである。生成文法理論に基づく言語理論と言語獲得研究は、今後、多くの言語学研究者の方々にご示唆を頂戴し、新たなメンバーととともに、現代言語理論を背景とした統語論研究と言語獲得研究を更に発展させることができれば、幸いである。

国立国語研究所は、20世紀後半、大久保愛氏の研究をはじめとし、言語獲得研究の中核であった。そこでの一連の優れた成果を、現代言語理論の下で、再度、見直す必要もあるだろう。本プロジェクトの成果が、言語研究の更なる発展の一助になることを祈っている。

村杉恵子

言語獲得からみる移動操作：かき混ぜ

村杉 恵子・杉崎 鉦司

1. はじめに

現代言語理論では、母語獲得は、生後取り込まれる言語経験と、ヒトに遺伝により生得的に与えられた言語獲得機構との相互作用により達成されると仮定されている。この言語獲得機構は、(i)全ての言語が満たすべき普遍的制約と、(ii)可能な言語間変異を定める制約からなると考えられているが、これらの制約の存在に関する母語獲得からの検討は、これまで主に欧米の言語を対象とした研究に限られている。本共同研究プロジェクトの目的の一つは、詳細な記述に基づいた言語理論研究に立脚して日本語の獲得過程を分析することにより、これらの制約の存在に対する新たな視点からの検討を行うことにある。具体的には、心理実験による実証的研究、および発話分析による記述的研究の両手法を用いて、日本語における文法知識の獲得過程を明らかにし、日本語獲得から言語獲得理論へ、さらに言語理論への貢献を目指している。

本稿では、本プロジェクトで研究が進められている「かき混ぜ」に関する獲得研究をとりあげ、ヒトに生得的に与えられた「普遍文法」の属性は、生後、幼児が獲得中の言語において当該の文構造と語彙を獲得するとともに発現することを実証的に示す。日本語は語順が比較的に自由な言語であると言われている。(1a)と(1b)は共に文法的な文であり、本質的な意味においても大きな違いは見られない。

- (1) a. アヒルが牛を 追いかけた b. 牛を アヒルが 追いかけた

Harada (1977)、Saito (1985)は、目的語が主語に先行する(1b)の様な文は、基底に(1a)があり、「かき混ぜ」という名詞句の移動操作によって派生されると論じた。本論文では、幼児がこの「かき混ぜ」の移動操作を、いつ、どのように獲得するかについて検証する。

Hayashibe (1975)はかき混ぜ文がかなり遅い時期まで正しく解釈されないことを観察し、Bever (1970)の *canonical sentence strategy* に従って、幼児は最初の名詞句を「動作主」、2番目の名詞句を「動作の対象」として、自動的に解釈すると考えた。de Villiers and de Villiers (1973)では、英語話者の受け身文の獲得においても同様の傾向が見られると報告している。しかし、Otsu (1994)では的確な文脈が与えられれば、3歳児でもかき混ぜ文を正しく解釈できると主張し、さらにMurasugi (2000)では、実験の場で特別な文脈を与えなく

とも、実験文として受け身文とかき混ぜ文の両方を提示することで「格」に注意を喚起できれば、2歳児でも的確にかき混ぜ文を解釈できることを実証的に示している。

Murasugi and Kawamura (2005)では、まず日本語を母語とする幼児がかなり早い時期からかき混ぜ文を正しく解釈できる事を示し、更にかき混ぜ文特有の統語的特徴も同時に獲得されている事を示している。最初の実験（実験[1]）では日本語話者の幼児の受け身文(2b)とかき混ぜ文(2c)の理解度を調べている。

- (2) a. 熊がネズミを追いかけた。 (能動文)
 b. [ネズミが]_i 熊に _{t_i} 追いかけられた。 (受け身文)
 c. [ネズミを]_i 熊が _{t_i} 追いかけた。 (かき混ぜ文)

次に、かき混ぜ文を正しく解釈できる幼児が、その統語的特徴も獲得しているかどうかを調べた実験研究を紹介する。

- (3) a. アヒルが 自分の庭で 牛を 追いかけた。
 b. [牛を]_i [自分の庭で]_j アヒルが _{t_j} _{t_i} 追いかけた。

日本語においては、「自分」という照応表現は、先行詞によって c-統御されなければならない。(3a)では「アヒルが」が「自分」を c-統御している。(3b)ではかき混ぜ操作によって c-統御の構造が表面上なくなっているにもかかわらず、同じ解釈が可能である。そこで、Saito (1989)は、かき混ぜ操作で移動した要素は意味解釈される際、元の位置に戻り、構造が再構成されると論じている。

幼児の言語知識の中に「かき混ぜ」とその特性が早くから存在することを示した後、本論文では、そのような早期獲得がいかんして可能となるのかについて検討を加える。具体的には、Fukui (1993) ならびに Saito and Fukui (1998) の主張する「(日本語タイプ)のかき混ぜは、主要部パラメータに関して主要部後置の値をとる言語においてのみ可能となる」という提案の妥当性を、日本語を母語とする幼児が手にする言語経験の観点および幼児の持つ基本語順に関する知識の観点から検討する。

2. 日本語のかき混ぜ文

2.1. 成人の言語知識

日本語を対象とする理論的研究においては、日本語の持つ比較的自由的な語順は、一種の移動によるものと考えられている。Haig (1976)、Harada (1977)は、Ross (1967)の「移動

は複合名詞句や付加詞句を超えて行うことはできない」とする島の制約を用いて、かき混ぜ文が移動によって派生されることを示している。

- (4) a. ジョンが_[CNP]あの本を 買った]人を]探しているらしい
 b. ?* あの本を_i[ジョンが_[CNP] _{t_i} 買った]人を]探しているらしい]
- (5) a. メアリーが_[AdjP]ジョンが東京に行きたがっているのに]無視しているらしい
 b. ?* 東京に_i[メアリーが_[AdjP] ジョンが _{t_i} 行きたがっているのに]無視しているらしい]

また、Kuroda (1980)は浮遊量化詞を用いて移動の存在を示している。一般に量化詞とそれが修飾する名詞句は隣接していなければならない。(6)では量化詞「2人」は「女の子」を修飾する事はできるが、「男の子」を修飾する事はできない。

- (6) 男の子が女の子を 2人見た。

しかしかき混ぜ文(7)では、「2人の女の子」という解釈が可能である。

- (7) 女の子を 男の子が 2人見た。

Kuroda (1980)は「女の子を」と「2人」はもともと隣接している為にこの解釈が可能であると説明し、(7)のような文は目的語の移動によって派生されているとする。

更に Saito (1989)は、かき混ぜ操作で移動した句は元の位置に戻って解釈されると論じている。

- (8) どの本を_i [メアリーが[ジョンが _{t_i} 図書館から借り出したか]知りたがっている](こと)

疑問詞は通常疑問文の中でのみ解釈される。(8)では主文が能動文、補文が疑問文であり、疑問詞句「どの本を」が正しく解釈を受ける為には補文内に戻らなければならない。この「再構成」の存在は、照応形を使った文でも観察される。

- (9) a. ?* お互い_iの先生が[ジョンとメアリー_i]を批判した。
 b. [お互い_iの先生を]_j [ジョンとメアリー_i]が _{t_j} 批判した。

「お互い」は「先行詞によって c-統御されなければならない」とする制約の規制を受けるため、(9a)は非文である。一方「お互い」を含む句が文頭に移動した(9b)は文法的である。これは移動した句が再構成によって元の位置に戻って解釈される為であると考えられる。後述する実験 2 ではこの再構成の知識の獲得状況を検証する。

2.2. かき混ぜの獲得に関する先行研究

Hayashibe (1975)は、幼児が課題文の内容をぬいぐるみで表現する動作法 (Act-out) の実験手法を用いてかき混ぜ文の獲得時期を調べ、かき混ぜ文は比較的遅い時期まで正しく理解されることがないと報告している。例えば(10)に対して、4-5 歳の幼児達が一律、アヒルがカメを追いかける状況を表現したと観察している。

(10) アヒルさんをカメさんが追いました。

Sano (1977)及び Suzuki (1977)も同様の観察をしている。このような幼児の「間違い」は、最初の名詞句を「行動主」、2 番目の名詞を「動作を受ける物」として自動的に解釈するためであり、かき混ぜ文が正しく解釈されるのは 5 歳まで待たなければならないとしている。

これ対し、Otsu (1994)は、適切な文脈があれば 3-4 歳児もかき混ぜ文を正しく解釈できると主張した。

- (11) a. 公園に アヒルが いました。 (文脈)
b. そのアヒルを カメが 追いかけてました。 (かき混ぜ文)

かき混ぜ文(11b)の理解度を調べる際に、文脈(11a)を与える場合と与えない場合を比較し、文脈がない場合は、幼児はかき混ぜ文を誤って解釈するのに対し、文脈が与えられた場合には、幼児はかき混ぜ文を正しく解釈できると報告している。これは、かき混ぜの適用を受けた要素は直前の発話との「橋渡し」(Masunaga1983)の役割を果たし、文脈がなければかき混ぜ文を使う必要がないので、幼児はかき混ぜ操作がないものとみなして主語-述語の関係を解釈する為だと論じている。

幼児の言語理解は文脈に左右されやすいので、この文脈依存の考えは妥当であると考えられるが、大人との違いを考えると、更なる研究の余地があると考えられる。Murasugi (2000)は、2-4 歳児のかき混ぜ文の理解度が、文脈を与えなくとも上昇する場合があるか

どうかを調べている。具体的には、課題文に受け身文を加え、かき混ぜ文との理解度の違いを検討している。

- (12) a. アヒルが 牛を 追いかけた。 (能動文)
b. 牛が_i アヒルに _{t_i} 追いかけられた。 (受け身文)
c. 牛を_i アヒルが _{t_i} 追いかけた。 (かき混ぜ文)

次節で Murasugi (2000)の実験を発展させた Murasugi and Kawamura (2005)の実験的研究を概観する。

3. Murasugi and Kawamura (2005) の実験 [1]

Murasugi and Kawamura (2005)の実験[1]では、2歳から6歳の計22人の日本語を母語とする幼児を対象とした動作法による実験を実施し、対照群として2人の大人も含めた。7つの能動文、7つの受け身文、7つのかき混ぜ文を無作為な順序で提示し、被験者である幼児はぬいぐるみを用いて提示された文の意味を表現することが求められた。

- (13) 実験者： これは何？
被験者： うし。
実験者： じゃ、これは何？
被験者： あひる。
実験者： そうね、じゃ、これから、牛とアヒルで私が言う事をやってみてね。
「牛をアヒルが追いかけた」 (実験文) 何が起きたかな？
被験者： (机の上のぬいぐるみを操作する。)
実験者： よくできたね。

この場合、被験者がぬいぐるみでアヒルが牛を追いかける動作を表現した時、正答と見なした。

結果は下の通りとなった。「能動文」「かき混ぜ文」「受け身文」の欄の数字は正答率を示す。

(14) 実験[1]の結果の詳細

被験者	年齢(歳)	能動文(%)	かき混ぜ文(%)	受け身文(%)
A	2	83	83	50
B	2	83	66	17
C	3	100	100	100
D	3	100	100	28
E	3	100	100	42
F	3	28	42	0
G	3	71	71	28
H	3	100	85	57
I	4	100	100	0
J	4	100	100	71
K	4	100	100	42
L	4	100	100	85
M	4	100	100	100
N	4	100	100	100
O	5	100	100	100
P	5	100	100	100
Q	5	100	100	100
R	5	100	100	100
S	5	100	100	100
T	5	100	100	100
U	6	100	100	100
V	6	100	100	100
W	大人	100	100	100
X	大人	100	100	100

この結果は Murasugi (2000)の実験に準じており、2つの点が注目される。まず、かき混ぜ文の正答率がきわめて高く、かき混ぜ文の獲得は能動文の獲得と同じぐらい早い時期に行われると言える。また、かき混ぜ文の正答率にくらべると受け身文の正答率は常に低くなっており、受け身文の獲得には時間がかかる事がわかる。この実験では文脈を与えなかったが、課題文に受け身文を含んだ事で、被験者の注意が「格」と「主題役割」の関係に向き、かき混ぜ文の解釈が正しく行われたと考えられる。

4. Murasugi and Kawamura (2005) の実験 [2]

実験[2]では、幼児が「自分」を含んだかき混ぜ文も正しく理解できるかという問題を取り上げ、それを調べることにより、かき混ぜ文の特徴である「再構成」の知識の獲得状況を明らかにすることを試みている。

(15) 牛を_i アヒルが_{t_i} 追いかけた。

(16) a. アヒルが 牛を [自分の庭で]追いかけた。 (能動文)

b. 牛を_i [自分の庭で]_j アヒルが_{t_j} _{t_i} 追いかけた。 (かき混ぜ文)

(15)のかき混ぜ文を正しく解釈できる幼児が、(16b)の様な「自分」を含む文を正しく理解できるかを調べた。「自分」は主語によって c-統御されなければならない要素であり、正しい解釈の為にはこの「自分」の語彙的・統語的特徴を理解していなければならない。そこでまず(16a)の様な文を用いて、被験者が「自分」の解釈として「牛」ではなく「アヒル」を的確に選ぶか調べ、これができる被験者に対し、かき混ぜ文(16b)においても「自分」の先行詞を正しく見つけることができるかを調査している。加えて、課題文に(17)のような受け身文も加えている。

(17) [熊が]_i ウサギに 自分の 庭で _{t_i} 追いかけられた。 (受け身文)

本実験では、「自分」を含んだ(16a)の様な能動文を 6 文、(16b)の様なかき混ぜ文を 8 文、(17)の様な受け身文を 6 文、計 20 の課題文を用意し、それらを被験者に無作為な順で提示した。実験[1]と同様、動作法 (Act-out) の手法を用い、実験[1]と同じ被験者 22 名が参加した。それぞれのぬいぐるみに対して庭や家が準備され、被験者は家や庭の中でぬいぐるみを動かして、課題文の内容を表現する事が要求された。実験では下のような対話が行われた。

(18) 実験者: アヒルはどれ?

被験者: これ。

実験者: 牛はどれ?

被験者: これ。

実験者: こっちが牛の庭ね。(実験者が牛用の庭の模型を指す)

こっちがアヒルの庭ね。(実験者がアヒル用の庭の模型を指す)

実験者: じゃ、これから私が言う事、やってみてね。
 「牛を自分の庭でアヒルが追いかけた」 (実験文)
 被験者: (机の上のぬいぐるみを操作する。)
 実験者: よくできたね。

この場合、被験者がアヒルのぬいぐるみがアヒル用の庭の模型の中で牛を追いかける操作をした場合、正答とみなした。下の表(19)の右側欄が本実験の結果である。

(19) 実験[2]の結果の詳細

被験者	年齢 (歳)	実験 1	実験 1	実験 1	実験 2	実験 2	実験 2
		能動文 (%)	かき混ぜ文 (%)	受け身文 (%)	能動文 (%)	かき混ぜ文 (%)	受け身文 (%)
A	2	83	83	50	0	NT	NT
B	2	83	66	17	0	NT	NT
C	3	100	100	100	100	100	50
D	3	100	100	28	100	100	33
E	3	100	100	42	100	100	16
F	3	28	42	0	50	38	16
G	3	71	71	28	66	50	50
H	3	100	85	57	83	87	50
I	4	100	100	0	100	100	33
J	4	100	100	71	100	100	33
K	4	100	100	42	66	75	16
L	4	100	100	85	83	87	33
M	4	100	100	100	100	100	33
N	4	100	100	100	100	100	50
O	5	100	100	100	100	100	100
P	5	100	100	100	100	100	100
Q	5	100	100	100	100	100	100
R	5	100	100	100	100	100	100
S	5	100	100	100	100	100	33
T	5	100	100	100	100	100	50
U	6	100	100	100	100	100	100
V	6	100	100	100	100	100	50
W	大人	100	100	100	100	100	100
X	大人	100	100	100	100	100	100

ここでは以下の3点に注目しよう。まず2歳児(AB)は「自分」を含む能動文を正しく理解できておらず、2歳では「自分」の語彙的・統語的特性を獲得できていないと思われる。

そのため、かき混ぜ文・受け身文のテストでは NT とした。一方、3-4 歳児は「自分」の特性を獲得しつつあるように観察される。

実験[1]でかき混ぜ文を正しく解釈した被験者 C、D、E (3 歳児) と I、J、M、N (4 歳児) は「自分」を含むかき混ぜ文も正しく解釈できている。なお、被験者 K、L の実験 2 のかき混ぜ文の正答率は実験[1]に比べて低くなっているが、能動文の正答率も高くない事を考慮すると、これは「自分」の特性の獲得が終了していない為であると考えられる。

また、かき混ぜ文と受け身文の違いに注目すると、実験[2]においても受け身文の正答率が低い事がわかる。特に被験者 C、M、N、S、T、V をみると、実験[1]では正しく解釈できていても、実験[2]で受け身文に「自分」が含まれると理解が難しくなっている。これは実験で使われた A-移動を含む直接受け身文を、移動を含まない間接受け身文として間違えて解釈している可能性を示唆している。

5. かき混ぜ文の実験研究と受け身文の獲得に関する所見

以上、日本語のかき混ぜ文とその特性の獲得に関する 2 つの心理的実験研究を紹介した。実験[1]では、能動文とかき混ぜ文の獲得状況に大きな違いは見られず、かき混ぜ文が従来考えられていたよりもかなり早い時期に獲得される事が示された。これには「格」と「主題役割」の関係に注意を向ける事が実験上重要であった。また、受け身文の獲得がかき混ぜ文の獲得に比べて遅れる事も明らかになった。ここで報告されているかき混ぜ文の獲得の時期は、2 歳児の自然発話においてかき混ぜ文が観察される事実とも一致している。

さらに、実験[2]では、幼児がかき混ぜ文を正しく理解することに加えて、かき混ぜ操作の特徴である再構成の統語的特性が、その時期に獲得されているか否かについて、実証的に調査を行った。実験[1]でかき混ぜ文を大人と同様に（正しく）解釈でき、更に「自分」の特性を獲得している子供が、実験[2]においても「自分」を含むかき混ぜ文も正しく解釈する事がわかった。ここから、かき混ぜ文を獲得する際、同時にかき混ぜ操作の特徴である再構成の特性も獲得していることが示された。また、この実験では「自分」の語彙的・統語的特性の獲得が 3-4 歳で行われる事も明らかとなった。ただし、実験[2]で用いた「自分」という表現は、先行詞に c-統御されねばならないという特性に加え、主語のみを先行詞とするという特性（「主語指向性」）を持つ。今回の実験で用いた(16b)のような文では、主語が同一文内に一つしか存在しないため、仮に幼児が c-統御の条件や再構成に関する知識として持たずとも、「『自分』は主語を先行詞とする」という知識を持っていれば、得られた結果が説明できる可能性もないわけではない。Isobe (2008)では、この点を回避するため、(20)のような埋め込み文を伴ったかき混ぜ文を用いて、幼児が再構成に関する知識

を持つか否かを確かめた。その結果、幼児はやはり再構成に関する知識を持っていることが明らかとなり、Murasugi and Kawamura (2005)で得られた結論が本質的に正しいことが確認されている。

(20) [パンダさんが自分_iの大きな鼻を叩いたと]_j ぶたさんは_i _{t_j} 思った。

再び実験[1]・実験[2]の結果に目を向けると、両実験で受け身文の獲得が遅れる事が判明したが、この原因として3つの可能性が考えられる。まず、Bever (1970)、de Villiers and de Villiers (1973)は、受け身文では語順が変わっているために獲得が遅くなると考えているが、この案では、かき混ぜ文の獲得も同様に遅くなる事が予測されてしまい、実験[1]で得られた結果と矛盾する。一方 Borer and Wexler (1987)、Schaeffer (1995)、Sugisaki (1999)、Minai (2000)なども述べるように、受け身文が含む A 連鎖の発現には「成熟」(maturation)という要因が関与しており、ある一定の発達段階まで幼児の知識に現れないためである可能性がある。また受け身文は形態的に複雑な形を持つためという可能性も考えられる。

Borer and Wexler (1987)は英語とヘブライ語の2種類の受け身に注目し、派生に A-移動を含む動詞的受け身文と A-移動を含まない形容詞的受け身文の獲得状況を調べたところ、同じ形態素が使われているにも関わらず、動詞的受け身文でのみ獲得遅延が見られたと報告している。ここから A-移動の獲得には時間がかかると論じた。Sugisaki (1999)は日本語の A-移動を含む直接受け身文と A-移動を含まない間接受け身文の獲得状況を比較し、また、Sugisaki and Isobe (2001)は文頭へのかき混ぜと動詞句内のかき混ぜ(A 移動)を比較し、同様の結論に至っている。

本論文で扱った受け身文はすべて派生に A 移動を含む直接受け身文であり、一方、かき混ぜ文はすべて A' 移動によって派生されたと考え得る種類の文であるため、本研究で観察されたかき混ぜ文と受け身文の獲得状況の違いは、A 移動の獲得に時間がかかるとする議論に矛盾しない。また受け身の形態の複雑さによる獲得の遅延の可能性も無視できない。間接受け身文では受け身形態素-rare は動詞であるが、直接受け身文では接辞とされており、このような接辞の獲得は時間を要する事が、別の研究において独立に報告されている (Murasugi and Hashimoto 2004)。また、この受け身接辞 は目的格と主題役割の吸収と主語への経験役割の付与という機能を持っており、直接受け身文の獲得の遅れが形態的複雑さに起因する可能性も否定できない。従って、受け身文の獲得の遅れは、A-移動の発現の遅れに加え、形態的複雑さによる獲得の遅れも考慮に入れるべきであろう。

6. かき混ぜの獲得とパラメータ理論


6.1. かき混ぜを司るパラメータ：幼児に与えられる言語経験の観点から

上記で議論したように、Otsu (1994)や Murasugi and Kawamura (2005)の研究により、かき混ぜに関する知識がすでに 2-3 歳児の段階で日本語を母語とする幼児に備わっていることが明らかとなっている。では、いったいどのようにしてこのようなかき混ぜの早期獲得が可能となるのだろうか。

この問いを考える際、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)による理論的研究が有益な知見を与えてくれる。これらの研究は、日本語だけではなく、英語にも随意的な移動があることに注目する。


(21) 日英語の随意的移動：

a. 日本語： かき混ぜ



 その本を_i ジョンが t_i 買った (こと)

b. 英語： 重名詞句転移 (Heavy NP Shift)



 They brought t_i into my room [the beautiful pink dress]_i.

Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)は、日本語の随意的移動が左方移動であるのに対し、英語の随意的移動が右方移動であるという違いに基づき、「随意的移動は、主要部パラメータの値を維持する方向に起こる」という一般化を提案している。日本語は、主要部後置型の言語であるため、随意的移動は、主要部の前方（つまり左方）へ起こるのに対し、英語は、主要部前置型の言語であるため、随意的移動は、主要部の後方（つまり右方）へと起こることになる。この理論的提案が正しければ、幼児にとっては、獲得しようとしている言語が主要部パラメータに関して主要部後置の値をとることを示す言語経験が、かき混ぜの獲得を助けてくれる重要な情報源となるはずである。Sugisaki (2012)は、この仮説の妥当性を、幼児が手にする言語経験の観点から検討した。

Sugisaki (2012)は、まず、幼児にとってかき混ぜの直接的な証拠になり得るであろう OSV（目的語－主語－動詞）の語順を持った文が、幼児に向けられた発話の中で、どのくらいの頻度を持つのかを分析した。CHIDES データベース (MacWhinney 2000) に収められた日本語を母語とする幼児 3 名分 (Aki, Ryo, Tai; Miyata 2004 a,b,c) に関して、幼児に向けられた母親の発話を分析した。分析対象となったコーパスの基本的情報は(22)にまとめた通り

である。これらのコーパスに収められた母親の発話の中に、どの程度 OSV 文が含まれるかを分析したところ、結果は(23)の通りであった。

(22) 分析対象となった発話コーパスに関する情報

	子どもの年齢範囲	母親の発話の総数
Aki's Mother	1;05:07 - 3;00:00	20828
Ryo's Mother	1;04:03 - 3;00:30	7345
Tai's Mother	1;05:20 - 3;01:29	47377

(23) 幼児に向けた母親の発話における OSV 文の頻度

	SOV		OSV	
	母親の発話数	%	母親の発話数	%
Aki's Mother	58	0.278%	1	0.005%
Ryo's Mother	3	0.041%	0	0.000%
Tai's Mother	51	0.108%	2	0.004%

(23)の表から明らかな通り、幼児に向けられた発話(母親の発話数)の中で、OSV の語順を持った文はほとんど存在しないことが明らかとなった。したがって、幼児が OSV の語順を直接的な手掛かりとしてかき混ぜ文を獲得している可能性は非常に低いと言える。

同様の主張が、先行研究である Kang (2005)において、韓国語の獲得に関して既に成されている。Kang (2005)は、Cho (1982)の観察に基づき、韓国語の幼児が手にする言語経験において OSV 文の頻度が非常に低いことを報告し、OSV 文が韓国語におけるかき混ぜの獲得に関する直接的な手がかりとはならないと主張している。

(24) 韓国語における幼児に向けた母親の発話における OSV 文の頻度

		Word Orders	
		SOV	OSV
Alicia's Mother (2;03-2;09)	+Accusative Case	2	2
	-Accusative Case	87	8
Paul's Mother (2;07 - 2;11)	+Accusative Case	3	3
	-Accusative Case	155	11
Anne's Mother (2;10 - 3;04)	+Accusative Case	4	0
	-Accusative Case	160	32
Total		411	56

(Cho 1982, cited in Kang 2005)

したがって、(23)にまとめた結果は、韓国語獲得について成された Kang (2005)の主張が、日本語獲得においてもあてはまることを示すものである。

では、日本語を母語とする幼児にとって、獲得しようとしている言語が主要部後置型であることを示す言語経験はどのくらいの頻度で与えられるのだろうか。この点を明らかにするために、Sugisaki (2012)は、幼児に向けられた発話の中で、「ここから」のような後置詞句の出現頻度を分析した。結果は(25)にある表のとおりである。

(25) 幼児に向けた母親の発話における後置詞句の頻度

	母親の発話の総数	後置詞句	
		母親の発話数	%
Aki's Mother	20828	776	3.726%
Ryo's Mother	7345	204	2.777%
Tai's Mother	47377	1274	2.689%

(25)の表からわかる通り、幼児に向けられた母親の発話の中に、後置詞句は比較的頻繁に現れる。Legate and Yang (2002)は、空主語パラメータを非空主語型の値に固定するのに必要と考えられる情報を *there* 構文であると仮定し、英語を母語とする幼児に与えられる言語経験における *there* 構文の頻度を分析したところ、頻度は約 2.5%であった。日本語を母語とする幼児にはこの数値を超える頻度で後置詞句の情報が与えられているため、日本語を母語とする幼児にとって、獲得しようとしている言語が主要部後置型の値をとると決定するのに十分な情報が言語経験に含まれていると考えることができる。

上記の結果は、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)の提案する「かき混ぜが可能であるかどうかは主要部パラメータと密接に結びついている」という仮説と合致するものであるが、果たしてかき混ぜを司るパラメータに関する他の理論的提案は、言語経験の分析から支持を得ることができるだろうか。以下では、自由語順に関する重要な理論研究の一つである Hale (1983)の提案に関して、検討を加える。

Hale (1983)は、Warlpiri 語（オーストラリア先住民の言語のひとつ）の分析に基づき、かき混ぜを許容するのは、生産的に空主語・空目的語を許容する言語であると提案した。Warlpiri 語も日本語も、空主語・空目的語を多用する言語であるが、では幼児が手にする言語経験にも、その点に関する十分な情報が含まれているだろうか。

スペイン語のように、空主語のみを許与する言語と日本語・Warlpiri 語のような言語を区別するためには、空目的語が明らかに含まれている文（つまり音形を持った主語に他動

詞が後続している文) に注目することが幼児にとっては必要であると考えられる。(22)にあげた 3 名の幼児の発話コーパスにおける母親の空目的語文の頻度を分析したところ、結果は(26)の通りとなった。

(26) 幼児に向けた母親の発話における空目的語文の頻度

	母親の発話の総数	空目的語文	
		母親の発話数	%
Aki's Mother	20828	46	0.221%
Ryo's Mother	7345	21	0.286%
Tai's Mother	47377	109	0.230%

(26)の表に示される通り、明らかに空目的語を含んでいると考えられる文は、幼児が手にする言語経験においては、1%にも満たない頻度でしか現れないことが明らかとなった。この数値は、上に述べた Legate and Yang (2002)の基準に照らすと、幼児にとって十分な量が与えられているとは言い難い。したがって、幼児がかき混ぜを獲得する際に、空目的語文に基づいてその可能性を決定している可能性は低いと考えられる。

以上をまとめると、幼児が手にする言語経験の性質から考えた際、当該言語においてかき混ぜが可能であるかどうかは主要部パラメータに依存している可能性は高いが、生産的な空目的語を許容するパラメータに依存している可能性は低いと考えられる。したがって、幼児の言語経験からの発見は、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)の理論的提案が妥当である可能性を高めるものと解釈できる。

6.2. 幼児日本語における基本語順

日本語を母語とする幼児が手にする言語経験においては、日本語が主要部後置型であることを示す情報が十分に含まれていることが明らかとなった。一方で、十分な情報が与えられているからと言って、幼児が実際にその知識を早い段階で獲得しているとは限らない。では、日本語を母語とする幼児が早い段階から実際に「日本語は主要部パラメータに関して主要部後置型の値をとる」という知識を持つことを示す証拠はあるだろうか。

Sugisaki (2008)は、日本語を母語とする 2 歳児が、OV (目的語-動詞) の語順が基本語順であるという知識を持つことを示すことにより、上記の問いに答えている。成人の持つ日本語の知識においては、(27)のどちらの文も許容されるため、一見、OV の語順も VO の語順も可能であるかのように見える。

- (27) a. ジョンがその本を買ったよ。
 b. ジョンが買ったよ、その本を。

しかし、Tanaka (2001)の研究が示す通り、(27b)のような VO 文は、限られた環境でしか可能とはならない。例えば、VO 文は、埋め込み文では許容されず、また目的語 *wh* 疑問文においても用いることができない。

- (28) a. メアリーは[ジョンがその本を買った]と信じていた。
 b. * メアリーは[ジョンが買った、その本を]と信じていた。
 (29) a. ジョンが昨日何を買ったの？
 b. * ジョンが昨日買ったの、何を？

これらの事実は、OV 文の方が VO 文よりも広い環境において許容されることを示し、従って日本語の基本語順は VO ではなく OV であるということを示すものと解釈できる。

Sugisaki (2008)は、自然発話分析を通して、日本語を母語とする幼児が、成人と同様に、OV 文のみしか許容されない環境があるという知識を持つことを示した。具体的には、CHILDES データベースに収められている 4 名の幼児の発話を分析し、(29a)のような OV 語順を伴った目的語 *wh* 疑問文と、(29b)のような VO 語順を伴った目的語 *wh* 疑問文の使用頻度を分析した。分析対象となった 4 名の幼児の発話コーパスに関する基本的情報が(30)の表であり、分析結果が(31)の表である。

(30) 分析対象となった幼児発話コーパス

幼児名	年齢範囲	幼児の発話の総数	発話データ収集者
Aki	2;06:15 - 3;00:00	12,415	Miyata (2004a)
Ryo	2;04:25 - 3;00:30	5,901	Miyata (2004b)
Tai	1;09:03 - 3;01:29	29,980	Miyata (2004c)
Jun	2;03:23 - 3;00:01	22,444	Ishii (2004)

(31) 分析結果

	Aki		Ryo		Tai		Jun	
	(S)OV	(S)VO	(S)OV	(S)VO	(S)OV	(S)VO	(S)OV	(S)VO
発話総数	518	38	252	43	1120	50	754	120
目的語 <i>wh</i> 疑問文の発話数	185	0	40	0	70	1	140	0
目的語 <i>wh</i> 疑問文の発話割合(%)	38.7	0	15.9	0	6.3	2	18.6	0

(31)の表が示す通り、日本語を母語とする幼児は、観察しうる最初期から、目的語 *wh* 疑問文においては OV 語順しか用いることをしない。この結果は、VO 語順は目的語 *wh* 疑問文において使用することができない、という知識を幼児がすでに持つことを示すものと解釈できる。つまり、この結果は、日本語を母語とする幼児が、日本語の基本語順は OV であるという知識をすでに持つことを示すものであり、したがって、「日本語は主要部パラメータに関して主要部後置型の値をとる」という知識が 2 歳の段階から備わっていることが明らかとなった。

6.3. かき混ぜを司るパラメータ：まとめ

6 節では、前節までに明らかとなった日本語におけるかき混ぜの早期獲得に基づき、いかにしてそのような早期獲得が可能となるのかについて検討した。幼児が手にする言語経験には、後置詞句に関する情報が豊富に含まれていること、および幼児が 2 歳までの段階で、日本語の基本語順が OV であるという知識を身につけていることを考慮すると、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)が提案する「かき混ぜが可能である言語は、主要部パラメータの値が主要部後置の値をとる言語に限られる」という理論的仮説が言語獲得の観点からも妥当であることが明らかとなった。

7. かき混ぜの獲得：これまでの成果と今後の展望

本論文では、かき混ぜの獲得について、実験研究・自然発話分析の両面から、また幼児の持つ言語知識及び周りの大人から幼児に与えられる言語経験の両面から分析した。これらの研究から明らかとなったことは、大きく分けて以下の 2 点と考えられる。

- (32)
- a. 日本語において、かき混ぜの知識は遅くとも 3 歳までには獲得されている。
 - b. 日本語を獲得中の幼児が手にする言語経験には、かき混ぜが可能であるということを直接的に示す文(OSV 文)がほとんど含まれていない。

(32b)の観察にもかかわらず(32a)が成り立つという発見は、母語獲得が生得的な「普遍文法」に支えられているという生成文法の基本的仮説に支持を与えるものである。したがって、日本語におけるかき混ぜの獲得に関する一連の研究は、母語獲得における「普遍文法」の関与に対し、日本語獲得からの新たな証拠を与えたものと解釈できる。かき混ぜという操作が英語には見られない点を考慮すると、(32)にまとめた発見の重要性は非常に大きいと考えられる。

一方で、かき混ぜの獲得に生得的な「普遍文法」が関与しているのであれば、より早い段階でかき混ぜの知識が獲得されていることも期待される。英語の獲得において、30か月の幼児を対象とした実験研究（例えば、Sutton et al. 2012 など）が盛んになってきている現状を考慮すると、2歳中頃の年齢を主な被験者としたかき混ぜの実験研究が今後の日本語獲得研究の一つのトピックになり得るだろう。

参考文献

- Bever, T. 1970. The cognitive basis for linguistic structures. In *Cognition and the Development of Language*, ed. J. R. Hayes, 4-353. New York: Wiley.
- Borer, H., and K. Wexler. 1987. The maturation of syntax. In *Parameter Setting*, eds. T. Roeper and E. Williams, 123-172. Dordrecht: Reidel.
- Cho, S. W. 1982. The acquisition of word order in Korean. *Calgary Working Papers in Linguistics*. University of Calgary.
- de Villiers, J., and P. de Villiers. 1973. Development of the use of word order in comprehension. *Journal of Psycholinguistic Research* 2:331-341.
- Fukui, N. 1993. Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24:399-420.
- Haig, J. H. 1976. Shadow pronoun deletion in Japanese. *Linguistic Inquiry* 7:363-371.
- Hale, K. 1983. Warlpiri and the grammar of non-configurational languages. *Natural Language and Linguistic Theory* 1:5-47.
- Harada, S.-I. 1977. Nihongo-ni 'henkei'-wa hituyoo-da [Transformation is necessary in Japanese]. *Gengo* 6:11-12.
- Hayashibe, H. 1975. Word order and particles: A developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 8:1-18.
- Ishii, T. 2004 *Japanese: Ishii Corpus*, TalkBank 1-59642-054-5, Pittsburgh, PA.
- Isobe, M. 2002. Reconstruction in child Japanese: A preliminary study. In *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, eds. T. Sano et al., 205-215. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing.

- Kang, B. 2005. A learnability puzzle in scrambling. In *Proceedings of the 29th Annual Boston University Conference on Language Development*, eds. A. Brugos, M. R. Clark-Cotton and S. Ha, 331-340. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.
- Kuroda, S.-Y. 1980. Bunkoozoo-no hikaku [The comparison of grammatical structures]. *Niti-eigo Hikaku-kooza 2: Bunpoo*, ed. by T. Kunihiro, 25-61. Tokyo: Taishukan.
- Legate, J., and C. Yang. 2002. Empirical re-assessment of stimulus poverty arguments. *The Linguistic Review* 19:151-162.
- Masunaga, K. 1983. Bridging. In *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguistics*, eds. S. Hattori and K. Inoue, 455-460. Tokyo: Proceedings Publishing Committee.
- MacWhinney, B. 2000. *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Minai, U. 2000. The acquisition of Japanese passives. In *Japanese/Korean Linguistics 9*, eds. M. Nakayama and C. J. Quinn Jr., 339-350. Stanford: CSLI Publications.
- Miyata, S. 2004a. *Japanese: Aki Corpus*, TalkBank 1-59642-055-3, Pittsburgh, PA.
- Miyata, S. 2004b. *Japanese: Ryo Corpus*, TalkBank 1-59642-056-1, Pittsburgh, PA.
- Miyata, S. 2004c. *Japanese: Tai Corpus*, TalkBank 1-59642-057-X, Pittsburgh, PA.
- Murasugi, K. 2000. Bunpoo kakutoku: Idou gensyoo-o tyuusin tosite [The acquisition of grammar with special reference to movement]. *Academia: Literature and Language* 68:223-259. Nagoya: Nanzan University.
- Murasugi, K., and T. Hashimoto. 2004. Three Pieces of Acquisition Evidence for the v-VP Frame. *Nanzan Linguistics* 1:1-19. Center for Linguistics, Nanzan University.
- Murasugi, K., and T. Kawamura. 2005. On the acquisition of scrambling in Japanese. In *The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity*, eds. J. Sabel and M. Saito, 221-242. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Otsu, Y. 1994. Early acquisition of scrambling in Japanese. In *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, eds. T. Hoekstra and B. D. Schwartz, 253-264. Amsterdam: John Benjamins.
- Ross, J. R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Cambridge: MIT dissertation.
- Saito, M. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Cambridge: MIT dissertation.
- Saito, M. 1989. Scrambling as semantically vacuous A¹-movement. *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, ed. by M. Baltin and A. Kroch, 182-200. Chicago: University of Chicago Press.
- Saito, M. and N. Fukui. 1998. Order in phrase structure and movement. *Linguistic Inquiry* 29:439-474.
- Sano, K. 1977. An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft

- sentences. *Descriptive and Applied Linguistics* 10:213-233.
- Schaeffer, J. 1995. On the acquisition of scrambling in Dutch. In *Proceedings of the 19th annual Boston University Conference on Language Development*, eds. D. MacLaughlin and S. McEwen, 521-532. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.
- Sugisaki, K. 1999. Japanese passives in acquisition. In *Cranberry Linguistics: University of Connecticut Working Papers in Linguistics* 10, eds. D. Braze, K. Hiramatsu and Y. Kudo, 145-156. Cambridge, Massachusetts: MIT Working Papers in Linguistics.
- Sugisaki, K.. 2008. Early acquisition of basic word order in Japanese. *Language Acquisition* 15:183-191.
- Sugisaki, K. 2012. Poverty of the Stimulus in the Acquisition of Japanese Scrambling. Poster presented at Formal Approaches to Japanese Linguistics 6 (FAJL 6), ZAS/Humboldt University, Berlin, Germany. September 27, 2012.
- Sugisaki, K. and M. Isobe 2001. What can child Japanese tell us about the syntax of scrambling? In *Proceedings of the 20th West Coast Conference on Formal Linguistics*, eds. K. Megerdooimian and L. A. Bar-el, 538-551. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.
- Sutton, M., M. Fetters, and J. Lidz. 2012. Parsing for principle C at 30 months. In *Proceedings of the 36th annual Boston University Conference on Language Development*, eds. A. K. Biller, E. Y. Chung and A. E. Kimball, 581-593. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.
- Suzuki, S. 1977. Nihongo-ni okeru gozyun hooryaku [The acquisition of word order in Japanese]. *Kyooiku-Sinrigaku Kenkyuu* 25:200-205.
- Tanaka, H. 2001. Right-dislocation as Scrambling. *Journal of Linguistics* 37, 551-579.

日本語における *wh* 島制約の獲得： 予備的研究*

杉崎 鉦司・村杉 恵子

1. はじめに

生成文法理論においては、母語知識の獲得は、(i) 獲得可能な言語の類を規定した生得的な仕組みである「普遍文法」(UG)と、(ii) 生後外界から取り込まれる言語経験の両者の相互作用により達成されると仮定されている。そして、生成文法理論に基づく母語獲得研究は、その主な成果の一つとして、UG に含まれると仮定される様々な属性に関し、それらが母語獲得の観察しうる最初期から幼児の言語知識に反映されていることを様々な手法を用いて示すことにより、UG の存在に対する極めて重要な証拠を与え続けてきた。これらの一連の研究の中で、主要な証拠の一つを成している研究に、*wh* 疑問文(に含まれる依存関係)に対する制約の獲得がある。例えば、de Villiers, Roeper, & Vainikka (1990)は、英語を母語とする幼児が(1)のような *wh* 疑問文を与えられた際、*wh* 句である *how* を、埋め込み節内の *paint* と結びつけて解釈することはせず、主節の *ask* と結びつけて解釈することを実験により示した。その観察に基づき、彼らは、(2a)に示したような間接疑問文からの移動を禁ずる「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint) が、英語を母語とする 3-6 歳児の言語知識の中に存在すると主張した。

- (1) How did the girl ask [who to paint]?
- (2) a. * How₁ did the girl ask [who to paint t₁]?
b. How₁ did the girl ask [who to paint] t₁ ?

本研究では、このような研究の流れを踏まえ、日本語獲得においても同様に、*wh* 疑問文に対する制約が観察しうる最初期から幼児の言語知識に反映されているか否かを実証的に調査する。Otsu (2007)による先行研究を概観し、その問題点を指摘した後、我々自身の予備的な実験調査で得られた結果を報告する。

2. 日本語における *wh* 島制約の獲得:先行研究

上記の(2a)および以下の(3b)に示される通り、英語において、*wh* 句が埋め込み節内から文頭へと移動する際、その埋め込み節が疑問文である場合には非文となることが Chomsky (1973)などで観察されており、この効果を生み出す制約は「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint)と呼ばれている。

* 本論文で報告されている実験調査の実施を許可して下さった津愛児園の先生方および保護者の方々、実験調査に参加して下さった園児の皆さん、そして実験補助を務めて下さった石橋果奈子さん・加藤実耶さん(三重大学人文学部)に、この場を借りて感謝申し上げます。

- (3) a. What_i did John say [that Mary liked t_1]?
 b. * What_i did John wonder [whether Mary liked t_1]?

Watanabe (1992)は、英語における *wh* 島制約と同様の効果が、(少なくとも顕在的には)義務的な *wh* 移動を持たない日本語においても見られると主張した。

- (4) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]思っているの？
 b. * ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの？

日本語における(4b)の非文法性が、英語における(3b)の非文法性を生み出す制約と全く同一の制約から導かれるものであるのかどうかという点や、(4b)にかかわる制約が統語的な制約であるのか、あるいは意味的・音韻的な制約であるのかという点に関しては、非常に多くの理論的研究がすでになされており、様々なアプローチが提案されている(例えば、Richards 2008 による要約を参照)。しかし、(4b)の非文法性を直接的に示唆してくれるような言語経験が全ての幼児に必ず手に入るとは考えにくいことを考慮すると、(4b)を非文とする制約は、UGの属性を反映したものである可能性が高い。もしそうであるならば、日本語を母語とする幼児の持つ言語知識は、観察しうる最初期から、この制約に従う体系になっていることが予測される。

Otsu (2007)は、この予測の妥当性を調べるため、日本語を母語とする3歳児20名・4歳児20名を対象とした実験調査を行った。実験の一つでは、まず、ジョンという人形を導入し、幼児には「ジョンが日本語を勉強中で、どれくらい日本語がわかるようになったか調べたいので、手伝ってほしい」という旨の説明を行った。その説明の後に、実験者が、幼児とジョンにお話を聞かせ、お話の後に、実験者がジョンに質問を行い、ジョンが質問に答えた。幼児が行うべき作業は、ジョンの答えそれぞれについて、「適切」なものであったかどうかを判断することであった。(なお、用いられている方法は、Crain & Thornton (1998)などで議論されている真偽値判断法(truth-value judgment task)に近いが、実際に幼児が判断を求められているのはジョンの答えの内容の「真偽」(truth)ではなく、ジョンの答えの形式の「適切さ」(appropriateness)であるため、若干方法が異なる。この点は、次節で述べる我々の実験にも当てはまる。)

実際に用いられたお話の一つは、(5)にある通りである。このようなお話の後に、(6)のような質問と、それに対するジョンの答えが幼児に提示された。

- (5) お話:
 太郎君と花子さんがなかよくテレビでドラえもんを見ていました。そこへ、おかあさんがおかしを持ってきてくれました。そして、太郎君に「太郎はだれが好きなの?」と聞きました。太郎君は「もちろん、ドラえもんさ」と答えました。おかあさんは花子さんにも「花子はだれが好きなの?」と聞きました。花子さんはほんとうはのび太君が好きなのですが、ちょっとはずかしかったので、「ひみつ」と答えました。

- (6) a. お母さんは花子さんに[誰が好きか]聞きましたか？ ジョン:はい。
 b. 花子さんは[誰が好きか]言いましたか？ ジョン:*はい。
 c. お母さんは太郎君にも[誰が好きか]聞きましたか？ ジョン:はい。
 d. 太郎君は[誰が好きと]言いましたか。 ジョン:*はい。

(5)のようなお話および(6)のような質問を 2 種類提示し、それにより得られた結果は、(7)の表のとおりであった。

(7) Otsu (2007)の実験結果

質問の種類	人形の答え	正答数及び正答率
お母さんは花子さんに[誰が好きか]聞きましたか？	はい	80 / 80 (100%)
花子さんは[誰が好きか]言いましたか？	*はい	80 / 80 (100%)
お母さんは太郎君にも[誰が好きか]聞きましたか？	はい	80 / 80 (100%)
太郎君は[誰が好きと]言いましたか。	*はい	74 / 80 (92%)

Otsu (2007)は、得られた結果から、日本語を母語とする幼児は埋め込み文が「と」で導かれているか「か」で導かれているかによって *yes/no* 疑問文であるか *wh* 疑問文であるかを区別することができ、したがって *wh* 島制約の効果に関する知識を持つと結論付けている。

Otsu (2007)の実験は、日本語における *wh* 島制約の獲得を調査することで、日本語獲得における UG の関与を実証的に示そうとした点で、大変価値のあるものである。しかし、導かれた結論に照らすと、その実験方法には重大な問題が潜んでいると言わざるを得ない。(4b)に示した通り(以下に(8b)として再掲)、日本語における *wh* 島制約は、「かどうか」のような疑問文を示す標識で導かれた節の中にある *wh* 句が、「かどうか」を超えて主節を作用域とすることができない、という効果を生み出すものである。同様に、(9b)に示すように埋め込み文が「か」で導かれている場合には、*wh* 句は埋め込み節内の「か」と結びつき、それを超えて主節を作用域とすることはできないため、(9b)は *wh* 疑問文ではなく、*yes/no* 疑問文として解釈される。(談話の状況によっては、(9b)に対し、「言ったよ。リンゴだよ。」のような形で、*wh* 句に相当する情報を、「はい/いいえ」の答えに追加して供給することは可能であるが、その本質的な解釈は *yes/no* 疑問文に限定される。)

- (8) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]思っているの？
 b. * ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの？
 (9) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]お母さんに言ったの？
 b. ジョンは[メアリーが何を買ったか]お母さんに言ったの？

したがって、幼児の言語知識の中に *wh* 島制約を反映した知識が存在することを示すためには、幼児が(9b)に対して、(その本質的な解釈として) *wh* 疑問文としての解釈を許容しない、という点を示さねばならない。一方で、Otsu (2007)の研究が端的に示した点は、幼児が(9a)のような「と」で導かれた埋め込み節を伴った *wh* 疑問文に対して、*yes/no* 疑問文としての解釈を許容しないという点のみであ

り、したがって幼児が *wh* 島制約の知識を持つか否かという点に関しては、答えを与えていないことになる。

次節で報告する予備的実験は、Otsu (2007)の実験研究の問題点を踏まえ、それを改善することにより、日本語を母語とする幼児が *wh* 島制約に関する知識を持つという点に対する明示的な証拠を与えることを目的としたものである。

3. 日本語における *wh* 島制約の獲得: 新たな実験

我々の新たな実験においては、日本語を母語とする幼児 28 名 (3 歳児 4 名、4 歳児 17 名、5 歳児 7 名; 年齢範囲は 3 歳 9 か月から 5 歳 5 か月で、平均年齢は 4 歳 7 か月) に対して予備的調査を実施した。実験方法は、幼児に質問を行う方法 (Question after Story) と、幼児に答えの適切さを問う判断法 (Appropriateness Judgment Task) を組み合わせる方法を用いた。まず、Otsu (2007) の実験と同様に、人形 (我々の実験では、恐竜の人形) を幼児に紹介し、「恐竜さんはまだ日本語が上手ではないので、質問に対する答えを間違えたら教えてあげてほしい」旨を伝えた。実験では、写真を見せながら、以下のようなお話を幼児に与えた。

(10) お話:

今日は、おさるさんがゾウさんのおうちに遊びに来ています。テーブルの上に、おやつホットケーキと果物があつたけど、2 人は一緒に果物を食べることにしました。ゾウさんはおさるさんに「何が一番好きなの?」と聞きました。おさるさんは「イチゴ!」と答えました。そこへ、ゾウさんのお父さんがお仕事から帰ってきました。お父さんは、ゾウさんに「何が一番好きなの?」と聞きました。ゾウさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、おみやげに電車のおもちゃをもらったので、「ぶどう!」と教えてあげました。



①



②



③



④



⑤

(10)のようなお話の後に、(11)のような質問を、幼児と恐竜の人形の両方に対して行った。手順としては、各質問について、まず幼児に答えを求めた。そして、各質問ごとに、幼児が答えた後に、恐竜に対しても同じ質問を行い、その質問に恐竜が答えた。幼児には、自らに対する質問に答えることに加えて、その恐竜の答えが適切であったかどうかについて、恐竜が手にしている○・×の紙を指し示すことにより判断することが求められた。典型的な会話は、(12)のように行われた。

(11) 質問の例：

- a. おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
(恐竜：うん、食べたよ。)
- b. おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
(恐竜：イチゴだよ。)
- c. ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
(恐竜：ぶどうだよ。)

(12) 典型的な会話：

- 実験者： (お話をした後に)今のお話わかったかな？じゃあまずたくちゃん(幼児の名前)に聞くよ。おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
- 幼児： 食べてない。
- 実験者： じゃあ、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
- 恐竜： うん、食べたよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (×を指さす。)
- 実験者： よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 幼児： イチゴ。
- 実験者： じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんは何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 恐竜： イチゴだよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (○を指さす。)
- 実験者： よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 幼児： うん、言ったよ。
- 実験者： じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、ゾウさんは何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 恐竜： ぶどうだよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (×を指さす。)

このように、幼児に質問を行う方法(Question after Story)と、幼児に答えの適切さを問う判断法(Appropriateness Judgment Task)の2種類を組み合わせた理由は、以下の通りである。前節でも述べたように、(11c)のような疑問文は、談話の状況によっては、「うん、言ったよ。ぶどうだよ。」のように、*wh* 句に相当する情報を、「はい/いいえ」の答えに追加して供給することが可能である。したがって、幼児に適切性の判断だけを求めてしまうと、(11c)に対する恐竜の答えが「適切」であるという反応が幼児から返ってきた際、それが(i)与えられた疑問文を *wh* 疑問文と解釈したためなのか、それとも(ii)「うん、言ったよ。ぶどうだよ。」のような答えの可能性に照らして「適切」と判断したのかの区別をつけることが難しい。そのため、各質問をまず幼児に尋ね、その答えを確認することで、幼児が与えられた疑問文を *wh* 疑問文と解釈したのか *yes/no* 疑問文と解釈したのかを確認した上で、人形の答えの「適切さ」を判断させることとした。

実験は、(10)のようなお話し2つと、フィラーとしてのお話し2つの計4つから構成された。お話の提示順・刺激文の提示順はそれぞれ2種類用意された。得られた結果は以下の通りである。

(13) 実験結果:

	(11a)のような 練習問題		(11b)のような 「～と～か」文		(11c)のような 「～か～か」文	
	幼児の答え	適切性判断	幼児の答え	適切性判断	幼児の答え	適切性判断
正答数	55/56	55/56	54/56	54/56	47/56	46/56
正答率	98.2	98.2	96.4	96.4	83.9	82.1

上記の結果が示す通り、幼児は、(11c)のような埋め込み文が「か」で導かれている文に対し、83.9%という高い割合で、*yes/no* 疑問文として解釈して答えを与え、同様に 82.1%という高い割合で *wh* 疑問文として解釈した人形の答えに対し「不適切」という判断を下す、ということが分かった。4名の幼児から、このような「～か～か」文に対して、一貫して、*wh* 疑問文として解釈したかのような反応(「ぶどう。」)が返ってくるとともに、そのような人形の答えに対しても「適切」であるとの反応が得られた。また、1名の幼児からは、「～と～か」文に対して、一貫して *yes/no* 疑問文として解釈したかのような反応(「うん、言ったよ。」)が返ってくるとともに、人形の「イチゴだよ。」の答えに対しても「不適切」であるとの反応が得られた。この点については次節で簡単に議論するが、幼児から得られた大部分の反応が *wh* 島制約に従った反応であるという発見が弱められるわけではないと考えられる。

4. 「誤答」に対する分析

以上、本論文では、普遍文法を反映した属性と考えられる *wh* 島制約の知識が、観察しうる最初期から幼児の言語知識に含まれているか否かについて、予備的な実験調査を実施した。本研究では、Otsu (2007)による先行研究が、日本語を母語とする幼児に *wh* 島制約の知識があるかどうかという点に直接答える実験デザインにはなっていない点に着目し、その点を改善した調査を実施した。本研究は、獲得研究において、調べようとしている理論的性質の本質を正しく認識することの必要性を

示唆したものと解釈することができる。

本実験の調査方法は、本質的には「Question after Story」で、全ての質問に関して、まず幼児に対して質問を行い、幼児は質問に回答する。そして、幼児が答えた後に、さらに恐竜の人形に対しても同じ質問を行い、幼児はその人形の答えに判断を与える。したがって、通常の実験の真偽値判断法 (truth-value judgment task) とは異なり、連続して判断のみを行うわけではなく、判断を行う前に、必ず与えられた質問 (yes/no 疑問文あるいは *wh* 疑問文) に自らが答えることが求められるという特徴がある。

今回の調査の結果、調査に参加した幼児達のうち、ほぼ大多数の反応において、本実験の主要な文となる「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」という質問に対し、幼児は、(大人と同様に正しく)「うん、言ったよ」と答え、人形の「ぶどう」という答えについては(大人と同様に正しく)「不適切」であると判断している。先に述べたように今回の実験においては、まず幼児から答えを引きだし、次に人形の答えについて、それが適切な答えであるかどうかについても判断させていることから、この実験結果は、幼児の知識を二重に確かめつつ引き出しており、極めて正確なものであるといえよう。本実験で得られた結果は、Otsu (2007)による先行研究よりはるかに説得力を持って、幼児に *wh* 島制約の知識があるということを示すことができたと考えられる。

さらに、本研究の結果では、少数の幼児からではあるが、興味深い「誤答」が、一定の一貫性を持って、複数の幼児から得られている。それは、上記の本実験の主要な文である「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」に対し、「誤って」「ぶどう」と子どもが答え、人形の答えにも「ぶどう」に対しても「誤って」適切であると判断しているのである。まずは、幼児の発話として、次に人形の答えの真偽の判断として、二重に示していることから、それは「理由のある誤答」であると考えることができる。そして、その結果は、単純に判断すると、幼児がこの文を *wh* 疑問文として解釈しており、しかも、*wh* 島制約に違反しているとも考えることもできよう。

しかし、先に述べたように、大多数の幼児が、他の場合については大人と同様の判断をしており、かつ、あるひとつの実験文ならびに文脈提示のときのみに一貫して観察される。このことから、これがいわゆる文法知識そのものに関わる問題ではなく、この「誤答」が、真偽値判断法の実験手法にある潜在的問題に関わる可能性があることを指摘したい。

問題となった実験文とその文脈提示を含むセットを再度みてみよう。

(13) 典型的な会話：「誤答」の場合

実験者： (お話をした後に) 今のお話わかったかな？ じゃあまずたくちゃん(幼児の名前)に聞くよ。おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？

幼児： 食べてない。

実験者： じゃあ、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？

恐竜： うん、食べたよ。

実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？

幼児： (×を指さす。)

- 実験者: よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 幼児: イチゴ。
- 実験者: じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんは何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 恐竜: イチゴだよ。
- 実験者: 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児: (○を指さす。)
- 実験者: よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 幼児: ぶどう。
- 実験者: じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、ゾウさんは何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 恐竜: ぶどうだよ。
- 実験者: 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児: (○を指さす。)

実は、この三つの質問からなる最初の二つは、提示されたお話の内容について、人形が正しく理解しているかを試すものである。このとき、幼児に判断が求められているのは、内容に関する「真偽」の判断である。ところが、最後の一つで試されているのは、提示された質問に対しての人形の答えが、「答えの形式」として適切なものかどうかである。すなわち二つのタイプの質問、「提示された内容がと怪獣さんの答えが内容的に一致しているか」と「人形が *yes/no* 疑問文を *wh* 疑問文としてではなく、『はい/いいえ』のいずれかで答えることができるか」が、この順番で幼児に与えられる。

更に、このとき、人形の答えとして『誤って』示される「ぶどう」は、まさに文脈の中で与えられた状況と合致している。このお話の中で食べられたものは、「ぶどう」であり、それは談話上、正しい内容である。「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」のような文において「ぶどう」のような答えは、上記でも述べた通り、成人の談話においては、*yes* の答えに後続して出てくるのが可能であるという点において、全く不可能とは言えない。

そして、複数の幼児が、この状況の下でのみ、三つ目の質問において、前の二つの答えと同様にお話の内容に関して答え、そして、その答えは、談話上、間違いとはいえないものを選んでいく。

先に述べたように、これらの結果が、幼児が、文法知識に問題があることを示しているとは考えにくい。*wh* 疑問文と *yes/no* 疑問文を混乱していないことは、フィラー (*filler*) として与えている調査からも明らかである。例えば、「カッパちゃんは何を切ったかな？」という *wh* 疑問文を与え、幼児に答えてもらった後に、人形にも同じ質問を行い、人形は「うん、食べたよ」と答える。この場合には、幼児に判断が求められているのは、「真偽」ではなく、「答えの形式」となっており、それについては大人と同じように「正しく」答えることができるのである。

Nakayama (1996)をはじめ、真偽値判断法は、幼児が、提示された内容の真偽を判断しているのか、提示された文の形式とそこで聞かれた文の答えが合致しているのかを判断しているのか、それら

を分けて調査することが困難であることが指摘されている。今回の実験で一貫して見られた「誤答」も、文法上の要因によるものでなく、幼児が、実験上、二種類の答えについて判断することが求められている（すなわち最初の二つは、内容について正しい名詞句を選択し、最後の一つは、『正答』として「はい」あるいは「いいえ」と答えればよい）ことを意識しない限り、それまでの答え方と同じ（この場合は与えられたお話の内容についての）タイプの形式で答え、幼児は与えられた文脈と談話に基づいて「正しい」内容を選ぶと考えることができる。

このことは、今回の実験者の観察と矛盾しない。幼児の中には、「～かお父さんに言ったかな？」というタイプの問いに対し、「言ったよ。アンパンマン。」という答えを返す場合があることも観察されている。

異なるタイプの問題について、前の答え方と同じ答え方をし続けるのは、動作法 (Act-Out Task) での“Bird in Hand Phenomenon”にも通ずる。幼児の傾向として、手にもったおもちゃを持ち続ける実験上の特徴のひとつは、真偽値判断法においても、いったん答える方法を決めたらそれを続け、同じ答え方を続けても、談話上、十分に、その答え方でもよいという範囲にあるのであれば、幼児は、判断に用いるスペースを談話まで広げ、結果的に、大人の文法としては『誤った』答えを選ぶ。

「いいえ」(No)と判断するに十分な材料が実験の場になれば、幼児は、「はい」(Yes)を選ぶとする Plausible Denial/ Plausible Dissent (Murasugi, 1988; Crain and Thornton 1998)の本質は、ここにもみられるといえよう。文字通り「はい」「いいえ」で答え「ればいい」ところを、前の答え方をひきずって、同じ答え方で談話上可能な広い範囲の中から答えを選ぶ特徴は、Plausible Ascent とでも称されるものかもしれない。¹

5. まとめ

本研究では、日本語を母語とする幼児が、*wh* 島制約の効果に関する知識を持つか否かに関する新たな実験調査を実施した。先行研究である Otsu (2007)の問題点を指摘した上で、それを改善した予備的実験の結果を報告した。本研究で得られた結果は、日本語を母語とする 3-5 歳児の中に、すでに *wh* 島制約の効果に関する知識が存在していることを示唆するものであると考えられる。日本語における *wh* 島制約が、UG の属性から導かれるのであれば、本研究の結果は、母語獲得に対する UG の関与に対して、日本語獲得からの新たな支持を与えるものであろう。

1. 今回の予備的実験では、「～か～か」文に対して、一貫して、*wh* 疑問文として解釈したかのような反応（「ぶどう。」）が返ってくるのと同時に、そのような人形の答えに対しても「適切」であるとの反応が数名から観察され、また「～と～か」文に対して、一貫して *yes/no* 疑問文として解釈したかのような反応（「うん、言ったよ。」）が返ってくるのと同時に、人形の「イチゴだよ。」の答えに対しても「不適切」であるとの反応も 1 名から得られている。これらの反応が、実験上の問題によるものであるのか、それとも幼児の言語知識から生じるのかは残された重要な課題である。これらの課題に取り組むために、またよりデータの精度をあげるために、再度、改訂されたデザインによる本実験を計画・実施予定である。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1973. "Conditions on transformations." In *A festschrift for Morris Halle*, eds. Stephen Anderson and Paul Kiparsky, 232-286 New York: Holy, Rinehart and Winston.
- Crain, Stephen, and Rosalind Thornton. 1998. *Investigations in Universal Grammar: A Guide to Experiments on the Acquisition of Syntax and Semantics*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- de Villiers, Jill, Tom Roeper, & Anne Vainikka. 1990. "The acquisition of long-distance rules." In *Language processing and language acquisition*, eds. Lyn Frazier and Jill de Villiers, 257-297. Dordrecht: Kluwer.
- Murasugi, Keiko. 1988. "Structural and Pragmatic Constraints on Children's Understanding of 'Backwards Anaphora.'" *UConn Working Papers in Linguistics* 2: 40-68.
- Nakayama, Mineharu. 1996. *Acquisition of Empty Categories*. Tokyo: Kuroshio.
- Otsu, Yukio. 2007. "Wh-island in child Japanese." Paper presented at Keio Workshop on Language, Mind, and the Brain. Keio University, March 18, 2007.
- Richards, Norvin. 2008. "Wh-questions." In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, eds. Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 348-371. New York: Oxford University Press.
- Watanabe, Akira. 1992. "Subjacency and S-structure movement of wh-in-situ." *Journal of East Asian Linguistics* 1:255-291.

Appendix: 今回の予備実験で用いられたお話とテスト文

(注) 実際に提示された順序は、以下とは異なる。

A. (Filler)

ライオンさんとかっぱちゃんが、お料理の練習をしています。ライオンさんは、お魚を切ろうかなと思いました。でも難しそうなので、ニンジンを切ることになりました。かっぱちゃんは、お料理が苦手なので、ライオンさんがニンジンを切るのを見てるだけにしようかなと思いました。でも、ライオンさんを見ていたらやってみたくなったので、かっぱちゃんは大好きなキュウリを切ってみました。

(質問 1) ライオンさんは、お魚を切ったかな？

(恐竜の答え: いいや、切らなかったよ。)

(質問 2) かっぱちゃんは、何を切ったかな？

(恐竜の答え: うん、切ったよ。)

B. (Filler)

パンダさんとペンギンさんは、お絵かきをして遊ぶことにしました。パンダさんは、バスの絵を描こうかなと思っています。でも、新幹線の方がかっこいいので、新幹線の絵を描くことにしました。ペンギンさんは、絵を描くのが苦手なので、パンダさんが新幹線を描くのを見てるだけ

にしようかなと思いました。でも、パンダさんを見ていたらやってみたくなったので、ペンギンさんは大好きな飛行機の絵を描いてみました。

(質問 3) パンダさんは、バスの絵を描いたかな？

(恐竜の答え：いいや、描かなかったよ。)

(質問 4) ペンギンさんは、何を描いたかな？

(恐竜の答え：うん、描いたよ。)

C. (Target Trial)

今日は、ウサギさんがカエルさんのおうちに遊びに来ました。ポケモンの絵本とアンパンマンの絵本があったけど、2 人は、一緒にアンパンマンの絵本を読むことにしました。カエルさんはウサギさんに「誰が一番好きなの？」と聞きました。ウサギさんは、「食パンマン！」と答えました。そこへ、カエルさんのお母さんがお買い物から帰ってきました。お母さんは、カエルさんに、「誰が一番好きなの？」と聞きました。カエルさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、お母さんがおやつにリンゴをくれたので、「アンパンマン！」と教えてあげました。

(質問 5) ウサギさんとカエルさんは、アンパンマンの絵本を読んだかな？

(恐竜の答え：うん、読んだよ。)

(質問 6) ウサギさんは、誰が一番好きとカエルさんに言ったかな？

(恐竜の答え：食パンマン。)

(質問 7) カエルさんは、誰が一番好きかお母さんに言ったかな？

(恐竜の答え：アンパンマン。)

D. (Target Trial)

今日は、おさるさんがゾウさんのおうちに遊びに来ています。テーブルの上に、おやつホットケーキと果物があったけど、2 人は一緒に果物を食べることにしました。ゾウさんはおさるさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。おさるさんは「いちご！」と答えました。そこへ、ゾウさんのお父さんがお仕事から帰ってきました。お父さんは、ゾウさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。ゾウさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、おみやげに電車のおもちゃをもらったので、「ぶどう！」と教えてあげました。

(質問 8) おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？

(恐竜の答え：うん、食べたよ。)

(質問 9) おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？

(恐竜の答え：いちご。)

(質問 10) ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？

(恐竜の答え：ぶどう。)

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約： 日本語獲得に基づく実証的研究

村杉 恵子

1. はじめに

20世紀前半まで、言語学は、「英文法」、「日本語文法」というように個別言語の特徴に関して体系化が進められ、また、幼児は、母語を白紙の状態から学習するとする思想が主流であった。しかし、20世紀中盤、言語学は大きな変革を遂げる。それは、言語獲得に関する疑問に始まる。人は、なぜ、そして、どのようにして言語を獲得するのだろうか。

幼児が言語を話すのは、一見、とても平凡なことに見える。しかし、人は、親の人種や社会的地位、あるいは知能指数に関わらず、生後わずか数年で、何語であっても生まれ育つ環境の文法を、母語として獲得する。幼児は、親から具体的に教わらずとも、はいはいをし、つかまり立ちをし、そして歩き出す。言語もまた、当たり前のように獲得される。それぞれの個人が置かれた言語環境は多種多様であるにもかかわらず、幼児は、本質的には均一の文法を自然に獲得し、聞いたことのないような文であっても発話するようになる。人は、なぜ、短期間に等質の言語知識を獲得できるのだろうか。

生成文法理論は、脳科学の発展にも裏付けられ、人間科学の一部として確立される。人間言語に共通の普遍文法が実在することや文法獲得にも普遍的特徴があることが明らかにされている。幼児は、どの言語を母語としようとも、共通する段階を経て母語を獲得する。年齢に個人差はあるが、その段階は、6ヶ月ごろから8ヶ月ごろには喃語期、10ヶ月から1歳には一語文が発話、二語文があらわれるのは20ヶ月から24ヶ月であるといわれている。

しかし、一見、文形式をもたないように見える発話においても、そこには実に不思議な人間の言語能力が垣間見られる。そして、膠着語であり主要部後置型である日本語だからこそ見えてくる幼児の言語特徴もある。

たとえば、日本語は、韓国語、ルーマニア語などと同様にオノマトペの豊かな言語である。日本語を母語とする幼児は、時制が文にあらわれない1歳前後の段階でオノマトペを

発話するようになるが、それはいわゆる親の発話を模倣したものではなく、自発的で自然発生的なものも少なくない。

自然発生的に生じた擬態語や擬声語が、裸動詞として用いられた後に「する」を伴って動詞句として表れるようになったり、裸名詞として用いられた後に指小辞(diminutive)「ちゃん」を伴い名詞句として表れる段階が在ることは、日本語の母語獲得で広く観察されている。橋本知子氏（南山大学・大学院研修生）は、今回のプロジェクトの中で、日本語を母語とする幼児（あつくん）の観察記録の中からオノマトペの獲得過程を精査し、親の使ったことのない「こんこんこん」というオノマトペを、当初「かなづち」について「こんこんこん、ない（かなづちがない）」というように用いはじめ、しばらくすると「こんこん ちゅ」（私はかなづちで（なにかを）打ちたい）と動詞として用いるようになったという発達段階を報告している。ここで注目されるのは、観察者(母親)が、一度もインプットとして与えていない擬態語や擬声語を幼児が自発的に発話している点である。自らの力で、音と意味を結びつける。

橋本氏は、さらに、親の発話の模倣によって擬態語が産出されるケースでも、その後、同擬態語が創造的に用いられるようになることも観察している。たとえば、母親が一度だけ（「あつくん」1:09の時期）ケチャップを「ちゅんちゅんちゅん」と（食物に）かける動作を伴って発話をした後のことである。自分がぶりっこのような母親語を発してしまった、と記憶するたった一度の自分の発話の後に、あつくんは、同様に、ケチャップをつけるとき、「ちゅんちゅんちゅん」と産出しはじめた。そして、その後、ケチャップのみならずマヨネーズを食物にかけるとき（1:09）、マーガリンを塗るとき（1:11）、名古屋名物「つけて味噌かけて味噌」のチューブ入りの甘味噌をかけるとき（2:00）、そして醤油をかけるとき（2:03）と、「液状の調味料」をかけるときに「ちゅんちゅんちゅん」を自発的に使用を拡張させたことを橋本氏は観察している。そして、その一方で、同幼児は、自発的に、粉チーズ、塩、こしょうなどの「液状ではない粉状のもの」を（食物に）かけるときには、「ちゃっ、ちゃっ、ちゃっ」と、異なる音形をもった表現を用いたとも観察している。この橋本氏の観察は、幼児が共通項をもつ意味を同じ音で表現し、共通項をもたない意味は別の音で表す力を、幼児自らが示すと分析されるだろう。

また、橋本氏の観察記録には、幼児の自発的な擬態語や擬声語にも多義性があり、単純に、語から語への類推でつくられているのではないと考えられる例もある。たとえば「あつくん」は、1:07 から 1:09 までは、「ぶーぶ」という語を、コップや飲み物、父親のビ

ール、お母さんのコーヒーなどの「液体」、あるいはその種の液体を「飲みたい」という（自らの）願望と・命令のいずれかのみについて用いていたのに対して、1;9 ごろからは、車やバス、ベビーカーなどの「車輪のついた乗り物」、あるいは、その種の車に「乗りたい」という意味と併用するようになったと橋本氏は観察している。この観察は、意味的に関連のない「液体」と「車輪のついた乗り物」が、同じ音形（「ぶーぶ」）として、幼児によって、自発的に、そして多義的に表されている例として分析される。

2013年5月にロンドン大学で開かれた擬態語・擬声語に関するワークショップにおいては、擬態語や擬声語とは、ちょうど人が概念を自由に絵画に描写するように、概念を音として言語化して表現する方法であり、言語のみに特化した仕組みではないとする主張がオランダ・マックスプランク研究所の研究者を中心に活発になされた。

しかし、一見したところ文法とは異なる性質をもつように見える擬態語や擬声語であっても、親の模倣のみで産出されるものでもなく、類推のみによってつくられているものでもない。また、親が一定の量のインプットを与えるからこそ産出されるものでもない。幼児は、自発的に、自分の心（mind）の中で、音と意味を独自の方法で結びつけ、大人の語彙へとつながる道を、自らの生得的に与えられた言語獲得装置に基づいて、つくる。人間の言語能力の一部には、音と意味をつなげる文法の素があることが、擬態語・擬声語の事例がからみてとれ、そこには、言語としての仕組みが見えるのである。¹ (Murasugi 2013)

幼児の生成する文が、単なる模倣ではないことは、幼児が共通して産出する「大人の文法では許されない文」の存在からも示される。日本語を母語とする幼児は、不思議なことに、言語獲得の過程で、大人の文法とは異なる文を(1)のように産出することがある。

- (1)
- a. 黒い*のクック (=黒いエナメルの靴)
 - b. 意地悪な*のおばちゃん (=意地悪なおばちゃん、シンデレラの継母)
 - c. ごはん食べてる*のバーバ (=ごはん食べている象のババー)
 - d. うさちゃん食べてる*のにんじん (=うさぎが食べているにんじん)

¹ ここで紹介した橋本氏の観察は、本プロジェクトの研究成果としてまとめたものである。またここに概説した分析内容は、ロンドン大学で行われた Workshop on Mimetics (University of London, SOAS, 2013年5月)において村杉が基調講演として発表した内容の一部である。

周囲から笑顔で受け止められては忘れられていく『幼児の誤用』は、常識的でわかりきったと思われる事柄であり、日常茶飯事のこのように見える。² しかし、親も言わない非文法的な文を、なぜ幼児は自発的に産出するのだろうか。何とも不思議な現象である。

自然科学は、一見、当たり前に見える事象について「これはなんだろう」と問う視点にはじまり、それが「なぜおきるのか」を問い、その解明にむけて理論的実証的研究を行う。大人も産出しない（幼児に入力されない）文を、なぜ幼児は、自発的に発話するのだろうか。なぜ幼児の発話に文法的誤用が観察されるのだろうか。

生成文法理論は、自然界の一部である人間の脳に在ると想定される言語を、いかなる機能が司るのかを解明しようとしている。その抽象的な機能が人間の多様な言語現象を説明しうるか否か、さらには、それがどのように説明しうるかを検証する試みである。生成文法理論の下では、文法とは、人間という種にのみ与えられた人間の生物学的な特性であると考えられている。

人間の生物学的特性は、経験に基づいてのみ学習されるものではない。人間は、ありとあらゆる言語の話者になりうる文法のメカニズムを持って生まれ出ずる。幼児は、生まれた環境の下で、直接的な言語教育を受けることもなく、生得的に与えられた言語獲得装置に従って、自ずと母語の文法体系を獲得する。言語経験の中で与えられる入力には個人差もあり、入力されるデータは、質的にも量的にも不十分であるにもかかわらず、生後わずか数年で個人差のない等質の母語文法に至る。その母語の文法に基づき、幼児は、自ら、誰からも聞いたこともないような文をすら、創造的に生成する。

母語の特性や言語にある普遍性（universality）や変異性（variations）は、いずれも基本的には普遍文法によって規定されている。世界の言語は、人間の生物学的特性を反映するものであるから、共通する特性を多く担う。しかし同時に、世界の言語は異なってもいる。そして言語間の相違もまた、人間言語の特性を反映する。Chomsky (1981)は、文法体系は普遍文法の一部として生物学的に規定された「すべての言語に共通する原理」と「言語間の違い（言語の多様性）を制限するパラメーター」から成ると考えている。人間言語の多様性は（複数の値を持つ）パラメーターとして、人間の生得的な言語のメカニズムの中で規定されると考えられている。

²幼児の誤用は、さまざまなレベルにおいて起きうる。たとえば、構音について、2歳前後の幼児が、「自分で」を「ぶんじんで」、「さききばらゆうきくん」を「さきからばゆうきくん」といった具合に挿入や転換をする現象もよく知られているが、本稿では、いわゆる文法に関する「誤用」に焦点をおく。

本プロジェクトは、生成文法理論のもとで大人の文法を分析し、それに関連する幼児の言語獲得のプロセスを研究することで、人間の「心」のメカニズムが説明されうるかについて、理論と実証の両面から研究を行う共同研究である。本報告書(日本語版)においては、英語版の成果報告書（2013年9月完成）をさらに推し進めた内容を、本プロジェクトの研究成果として概観する。特に、「原理とパラメターの理論」の枠組みで、日本語という言語の大人の文法と獲得段階を研究するからこそ見えてくる興味深い記述と分析を提示したい。

前章では、かきませ操作とその特性についての獲得、さらに *wh*-問文とその制約に関する研究を紹介したが、報告書最後の章となる本稿では、幼児の『誤用』から見える日本語の特徴を概観したい。

母語の特性には、わずか1歳程度といった早期に獲得されるものもある。たとえば、母語の語順や、項脱落（主語や目的語などの項が音形を持たずに表れることができる言語現象）といった特性は、母語に触れてまもなく獲得される。一方、幼児は、大人の文法では非文法的な、共通した『誤用』を自発的に生成する。

幼児の『誤用』とは、幼児は親も直接教えもしないのに、自らの普遍文法に基づいて、母語以外の言語のパラメター値を自発的に試した結果である可能性がある。それは、母語体系のもとでは『誤用』とされるが、普遍文法に規定された範囲にある（母語以外の）文法の特徴が表れたものであると考えることもできる。本稿では、文法的な誤用は単なる『間違え』ではなく、「自然言語に存在する文法の範囲内で規定されうる形である」とする提案とその根拠となる議論を紹介する。

2. *small v* に関する『誤用』から見る幼児の文法知識

本報告書では、岸本氏やならびに斎藤氏により、複合述語文の構造が詳細に扱われているが、幼児の獲得においても、複合述語文は興味深い諸相を示す。

幼児は *small v* の構造そのものは、かなり早い段階から「する」などの動詞としてあらわすと考えられるが（Murasugi and Hashimoto 2004a）、動詞の活用として大人と同じ音形をもつようになるまでには時間がかかる。

自他交替に見られる誤用は 日本語を母語とする2歳前後から4歳頃の幼児に広く見られ、日本語獲得の中間段階に見られる代表的な現象である。(2)では、使役の意味を表す動詞や他動詞が自動詞として使われている。(発話の後の()内は意図された意味を表す。)

(2) 子ども：お父さん、膨らんで。(お父さん、風船を膨らませて)

父親：膨らんでじゃないでしょ、膨らましてでしょ。

子ども：ふくらんで。(膨らませて) (鈴木 1987)

これは、子どもが父親に風船を膨らませてくれるよう頼む状況での発話を記述したものである。父親は、動詞の形式が子どもの意図を表す動詞形ではないことを伝え、使役形「膨らませる」を明示的に教えるが、子どもはこの直接否定情報にもかかわらず、『誤った』非対格動詞「ふくらむ」を命令形の形式で産出し続けている。

この観察は、幼児の産出に誤用が在ることを記述しているに留まらない。幼児は、親から否定情報を直接的に与えられても、一定の時期が来なければ即座には修正できないことを、発話の状況とともに記述する極めて優れた観察記録である。

同様の『誤り』は2歳頃から4歳頃の他動詞と自動詞の関係においても見られる。

(3) 子ども(3;11): おとうちゃん、まど あいて。(お父さん、窓を開けて)

父親： 窓開けてだろ？

子ども： うん、まど あいてよ。(うん、窓を開けてよ) (大津 2002)

(3)では、子どもが父親に窓を開けるように頼んでいるが、子どもは他動詞の「あけて」(開ける)の代わりに、非対格動詞の命令形「あいて」(開く)を産出している。

実のところ、幼児が自動詞と他動詞を混同するのは日本語特有の現象ではない。たとえば、Bowerman(1974)とFigueira(1984)は、英語やポルトガル語を母語とする幼児が使役動詞や他動詞を自動詞で代用する誤用をそれぞれ報告している。

(4) a. You can drink me the milk

b. (・・・) este balance vai te cair

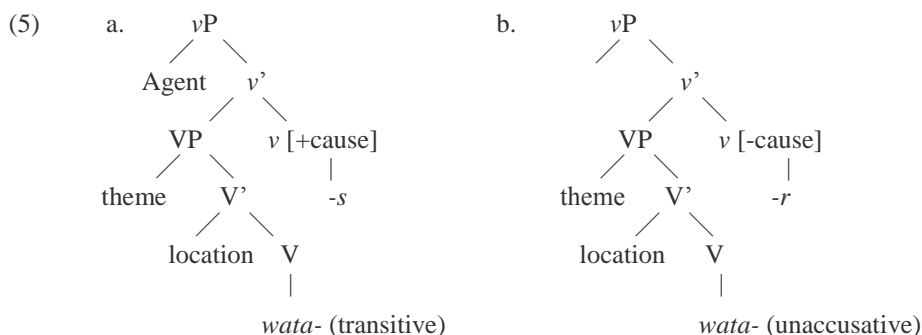
this swing go you fall 'This swing is going to fall you.'

(4a)では子供は母親に牛乳を飲ませてくれるよう頼んでいるが「誤って」*drink*が使われており、(4b)では「落とす」とすべきところで「落ちる」に相当する動詞が使われている。

但し、日本語の場合膠着語であることから、幼児言語で「させ」「せ」「え」等の[±cause]

を具現化する束縛形態素が落ちることが、明確に見てとれるのである。

ではなぜ、幼児は、(2)-(3)のような発話をするのだろうか。大人の日本語で、他動詞と非対格動詞は、(5)に示すように異なった接尾辞が伴う形式を持つ。Murasugi and Hashimoto (2004a)ならびに Murasugi (2012)では、この動詞句類について、Larson (1988)、Hale and Keyser (1993)、Chomsky (1995) に従い VP-Shell 構造を採用し、膠着語特有の（個別に習得される）動詞の接尾辞は *vP* の主要部に相当すると分析している。(5a)で *v* [+cause]は *-s*、(5b)では *v* [-cause]は *-r* として具現化されている。



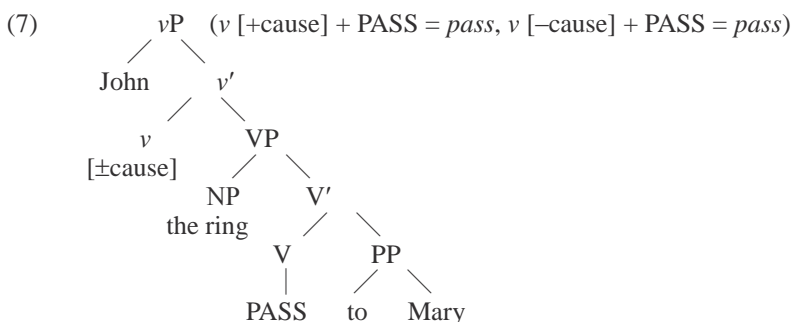
では、日本語を母語とする幼児は、なぜ、自動詞とすべきものを他動詞の形で、あるいは他動詞とすべきものを自動詞の形で産出するのだろうか。Murasugi and Hashimoto (2004a)、Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007)ならびに Murasugi (2012)では、日本語の獲得段階に見られる他動詞（使役動詞も含む）と非対格動詞の交替について、先行研究に蓄積されたデータに加え、独自の縦断的研究に基づき、動詞獲得のいくつかの段階とその過程で広く観察される『誤り』について記述した。そして上記の VP-Shell 分析を与えることにより、機能範疇 *v* (small *v*) は言語獲得早期に獲得されるが、形態を習得するのに時間（年月）がかかるため、幼児はある段階で非対格動詞を他動詞として用いたり、あるいは逆に他動詞を非対格動詞として用いたりすると説明している。すなわち、幼児の日本語に広く観察される(2)-(3)のような『誤り』は、主語に意味役割を与える *v* が無標の値としてゼロ形態素と仮定されることが一因である提案している。

この幼児の言語獲得の中間段階にみられる『誤用』は、実は他の言語においては文法的であり、人間言語の多様性を表す証しともなる。大人の英語において、他動詞と非対格動詞はしばしば同じ音形を持つ。

(6) a. John passed the ring to Mary

b. The ring passed to Mary

もしこれらの項構造が VP-Shell 構造として(7)のように表されるとすれば、この言語では *v* は音形を持たない“ゼロ形態素”として表れると分析される。すなわち、(6a)では *v* は[+cause]、(6b)では[-cause]の素性を持つが、いずれも音形を伴わない。その結果、*v* [+cause]+PASS も *v* [-cause]+PASS も同形の *pass* として具現化される。



このように考えると、自他交替に関する幼児の『誤り』は、他動詞と非対格動詞が同じ音形によって表される英語のような言語の特徴を示すものであり、日本語以外の言語の一特徴が、幼児の言語発達段階に顕在化したものとして考えることができる。この事例は、幼児の動詞の『誤用』が、他言語において実際に可能な形式として具現化されうることを理論的に示唆するものであろう。

3. 時制に関する『誤用』から見る幼児の文法知識

3.1. 主節不定詞現象

前節に示したように、機能範疇の *v* (small *v*) が音声的にどのように具現するかを獲得するには時間がかかる。しかしそれ以前の段階において、幼児は、動詞とその屈折（活用）に関し、大人とは異なった形を用いる。

「主節不定詞現象」は、言語獲得理論において広く研究されてきた幼児の『誤用』の一つであり、1歳から3歳頃の幼児が時制を伴わない動詞形式を主節内で使う現象である。フランス語、オランダ語、ドイツ語などでは不定詞が、英語では裸の動詞が、主節内で表れる。

- (8) a. Dormir petit bébé.
sleep-INF little baby
'Little baby sleep.' (Daniel、フランス語：1;11)
- b. Earst kleine boekje lezen.
first little book read-INF
'First (I/we) read little book.' (Hein、オランダ語：2;6)
- c. Papa have it. (Eve, 英語：1;6)

かつて、言語獲得研究史において、幼児の主節不定詞（Root Infinitives）の現象はすべての言語において観察されるわけではないとされてきた。空主語（pro）を許さない英語のような言語においては主節不定詞現象が存在するが、空主語を許すイタリア語のような言語では主節不定詞現象は見られないと議論する論文が発表され、空主語言語か否かが、主節不定詞の有無と強い相関関係を持つとする提案がなされたこともある（Guasti 1993/1994等）。日本語もその例外ではなく、日本語のように空主語を許す言語においては主節不定詞現象が存在しないとする仮説（Sano 1995等）も提案されてきた。

このような提案に対して、Murasugi, Fuji and Hashimoto (2007), Murasugi and Fuji (2009), Sawada and Murasugi (2011), Murasugi and Nakatani (2011)などでは、すべての言語の初期の言語獲得の段階には、時制を欠く動詞を産出する段階があり、それが「主節不定詞」現象に相当する現象と考えられ、当該の言語が空主語言語か否かは、その言語の主節不定詞の有無とは直接的な相関関係がないとする提案を発表してきた。³ 日本語ではヨーロッパ言語の不定詞形に相当する形は顕在化しないが、日本語獲得においても、いわゆる主節において定形ではない動詞が表れる「疑似主節不定詞」が存在する。

さらに、日本語という膠着語であり格標示の豊かな言語の獲得を詳細に検討すると、「(疑似)主節不定詞」と称される現象が、実は時制に関する二つの独立した問題に起因するこ

³ 本論で概観する主節不定詞現象についての詳細は、南山大学言語学研究センターのホームページにも一部掲載されている。Murasugi (2009a), Murasugi and Watanabe (2009), Murasugi, Nakatani and Fuji (2010), Sawada, Murasugi and Fuji (2010), Murasugi, Fuji and Hashimoto (2007), Murasugi and Fuji (2009), Sawada and Murasugi (2011), Murasugi and Nakatani (2011)等を参照されたい。これらの研究は南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻、南山大学言語学研究センター、そして国立国語研究所の活動の賜物である。本現象について共に研究を深めてきた仲間に感謝する。特に Luigi Rizzi 氏、Amritavalli 氏、Jayaseelan 氏、Diane Lillo-Martin 氏、William Snyder 氏、Bonnie Shwartz 氏、Kamil Deen 氏、Jonah Lin 氏、Peter Sells 氏、富士千里氏、中谷友美氏、橋本知子氏、渡邊恵理子氏、澤田尚子氏、瀧田健介氏、河合道也氏、岸本秀樹氏、多田浩章氏、斎藤衛氏との議論の時間はかけがえのないものであった。この場を借りて、深い感謝の意を表する。

とがわかる。1歳代のそれは Rizzi (1993/1994)の提案するように、時制節が投射されていない時期である。一方、2歳代のそれは、時制節は獲得されているものの、母語の時制素性の詳細が決定されていない時期であり、このとき主語への主格付与において『誤用』が表れる。これは、Schütze and Wexler (1996)の述べるところの AGR/TNS Omission Model (ATOM) 仮説によって説明される現象である。以下、幼児の言語獲得の初期段階に観察される主節不定詞現象について概観する。

3.2. フェイズで「切り取られた」構造を持つ獲得段階

幼児の初期の動詞「主節不定詞」は、いわゆる不定詞形を持たない（たとえばギリシャ語）言語においても別の形式を伴って表れる。言語差を超えた特徴として、主節不定詞は、要求や願望などを表すコンテキスト (Modal Context) において表れることが多く (Modal Reference Effects)、また出来事を表すイヴェンティヴ動詞が時制や一致を欠いた形式で産出される (Hoekstra and Hyams 1999)。同時期には幼児の「文」には空主語が多く表れ、補文標識 (Complementizer) に関連する要素や助動詞や主格といった時制に関する機能要素も表れない。

日本語の「(疑似) 主節不定詞」の「一層目」の段階は、1歳代という早期に表れる。この段階では、日本語でも述語は時制などを表す形態を欠き、動詞の形式はいわゆる過去形の「-た形」で表れることが多く、形容詞は一貫して非過去(現在)の形式で表れる (Murasugi and Fuji 2009, Murasugi, Nakatani and Fuji 2010 等)。

たとえば CHILDES コーパスにおさめられている野地コーパス (野地(1973-77)に基づく日本語を母語とする幼児「スミハレ」(男子、1948年生まれ)の日記データ(縦断的自然発話観察記録))を詳細に検討すると、1歳6ヶ月頃はほぼすべての動詞がイヴェンティヴなものであり、「-た形」(典型的には過去を表す活用形)で表れる。幼児の「-た形」は過去を表すだけでなく、(9)のように意志や要求、(10)のように結果相や進行相を表す場合もある。

- (9) a. あっち いた (1;6) (あっちに行って/行け)
 b. ちー した (1;7) (ちー (おしっこ) したい)

- (10) a. ばば ついた (1;6) (ばば (糸くず) が (指に) ついている)
b. ちーした (1;7) ((けいこちゃんが) ちー (おしっこ) している)

この時期には格助詞や動詞・形容詞の時制の屈折、補文標識に関する要素が観察されず、発話者の要求や意志を表すコンテキストで主節不定詞が用いられる。「Modal Reference Effects」が日本語においても認められるなどの点において、他言語の「(疑似) 主節不定詞」の特徴と性質を一にする。(疑似) 主節不定詞が動詞の 100 パーセントを示したのは 1 歳 6 カ月頃であり、その後は、「ちゃった」形や「ちょうだい」形なども自然発話において併出する。

Rizzi (1993/1994)は、この時期の幼児特有の現象の説明として、TP 構造よりも下の位置で切り取りが行われるとする刈り取り仮説 (Truncation Hypothesis) を提案している。大人の文は CP 構造を持つのに対し、幼児は、投射を途中で中断する段階があるという仮説である。この仮説は、主節不定詞の表れる時期に、疑問文 (C 要素に関する項目) や助動詞 (T 要素に関する項目) が表れず、また空主語が多く表れる事実も統一的に説明する。

日本語についても説明力を持つ。この時期、日本語においてもまた、時制を表す動詞の活用形のみならず、形容詞も活用形が一つ以上は表れることがなく、(疑似) 主節不定詞と共起して疑問詞 (C 要素に関する項目) や「が」格の主語が表れる事はない (Murasugi, Fuji and Hashimoto 2007, Murasugi, Nakatani and Fuji 2010 などを参照されたい)。

また、「もう」「まだ」「あした」等の時制に関する副詞も同一文内で主節不定詞とは共起しない。⁴

- (11) a. もう。 (1;05, 1;06)
b. もう、ない。 (1;09)
c. まだ。 (1;11)
d. まだ、ぱん。 (1;11)
e. また、あた。 (あした) (1;01)

この種の副詞が、同一文内で動詞と共起しはじめるのは、非過去形（一る形）の形式が

⁴ ここでの分析は、主節不定詞が表れる同時期に、時に関する副詞がどう表れるかをみることがその時の幼児の構造を調べるのに有効である可能性があるとして岸本秀樹氏 (2011 年 12 月 17 日, p.c.) によるご指摘に基づくものである。中国語では、必ずしも、時制と副詞は顕在的に呼応した形式であられないことから、これについては今後も岸本氏とともに調査を続ける予定である。

異なる動詞において生産的に表れ始める 1 歳 11 カ月頃からである。このとき、副詞の音声的具現化は、(12b) に示すように、大人のそれとは一致しないことも少なくない。

- (12) a. もう、つんだ。(=すんだ) (コンテキスト: 便所ですむとこのように父に言う 1;10)
 b. まだ、おちた。もつと、おちたよ。(コンテキスト: 午前 7 時過ぎ、床の中にいて、キャラメルを落としたときに、いう 1;11)

『幼児の誤用』の中には、「同じ統語的範疇」内で『誤って』音声的・語彙的に具現化される場合が少なくないが、副詞もまた例外ではない。⁵ 副詞が大人と同じような音形を伴って生産的に使用されるようになるのは、動詞の活用や主格が生産的に表れはじめる 2 歳以降である。

- (13) a. やっとねんねした。 (2;2)
 b. まだあいてないよ。 (2;1)
 c. かあちゃん、おちや、もうないよ。 (2;1)
 d. いまさっきおったのくも、どこいった? (2;5)
 e. きのう、おふねがでなかったね。 (2;9)
 f. きょう、なにゆったの? (2;7)

これらの事実は、(疑似) 主節不定詞現象が、Rizzi(1993/1994)の述べるように、時制句の投射のない時期、より最近の分析では、フェイズ (phase) ごとに幼児が構造を切り取る段階と考える上での記述的な根拠となりうるだろう。

では、なぜ「-た形」が日本語の「(疑似) 主節不定詞」なのか。興味深いことに、大人の文法において、この「-た形」は、過去のみならず「(さっさと) 帰った! 帰った!」といった命令形としても使われる。それは、イタリア語等で 強い命令形として不定詞が使用される現象に通ずる。また「-た形」は、非現実・未然(「もしも私が家を建てたなら」)、あるいは出来事の結果(「小さく切った大根」といった形態も兼ねる。そして、「行ったり来たりする/した」というように時制に関して無指定の形態素としても用いられる。幼児は、

⁵ この時期、いわゆる「wh-句」(「誰」「何」等)の補文標識に関連する要素も、疑似主節不定詞とは、同一文内で共起しない。ここで示された事実と分析については、村杉(印刷中)を参照されたい。

時制句を投射しない段階で、「不定形」としての「動詞の語幹+た」の形式を、他の形態の代用形として用いていると考えることができる。

さらに Murasugi, Nakatani and Fuji (2010)ならびに Murasugi and Nakatani (2011)は、幼児言語の対照言語学的調査に基づき、いわゆる「(疑似) 主節不定詞」の動詞の形態は、世界の言語を三分化すると提案している。裸動詞（英語、スワヒリ語等）の場合、不定詞（ドイツ語、オランダ、フランス語等）の場合も、そして動詞の語幹にデフォルトの形態が代用形として付いた形式で表れる場合（日本語、韓国語、トルコ語、ルーマニア語、アラビア語、ギリシャ語等）である。この言語間の相違は、当該言語において、動詞の語幹がそれ自体独立した形態として成立しうるか否かの違い（Stem Parameter）と関係する。語幹がそれ自体では形態的に成り立たない[-stem]のパラメータ値を選ぶ言語を母語とする幼児は、いわゆる「不定形」として動詞の語幹に（当該の大人の文法での）デフォルトの形態を代用形として付ける形式を産出し、わずか1歳という段階で母語の動詞形態の体系の特性を反映した（疑似）主節不定詞の形式を選択する。Murasugi (2009a)は、屈折や活用の豊かな言語の主節不定詞が、そうでない言語（たとえば英語）よりも早期に表れる事実を示した上で、Wexler (1998)の Very Early Parameter Setting (VEPS) の提案（語順や空主語などに関するパラメータは生後かなり早い段階で設定されるとの提案）の一部に Stem Parameter も含まれ、形態的特徴は、わずか1歳で設定されるパラメータ値の一つであると提案している。

3.3. T(ense)の素性が未指定の時期

アスペクトを示す「ちゃった」「て（い）る」などが1歳代に表れた後、2歳前後には多様な動詞や形容詞に時制が付加されるようになる。この時期は、多くの言語で、（疑似）主節不定詞が随意的（optional）に観察され、かつ主語の名詞句に、属格や与格が『誤って』付与される段階でもある。

この時期について、Schütze and Wexler (1996)は、T(ense)の持つ素性（Agreement/ Tense）が未指定な段階であるため、文の主語名詞句が、主格以外の『誤った』格に伴われて（たとえば*My do it, *Me want it などのように）表れると分析する。

この時期が、時制が投射されていない時期だとは考えにくい根拠は Radford (1998)による指摘からも独立に示される。たとえば2歳以降の属格主語の『誤用』が表れる時期には、英語において、助動詞も同一文内に共起している。

(14) a. Oh, my *can't* open it by myself (Child 3, 2;6)

b. Can our do it again? (Sophie 3;0)

「主節不定詞」現象がヨーロッパ諸語を母語とする2歳頃の幼児に随意的に観察される頃、日本語を母語とする幼児もまた、主語名詞句を主格のみならず、随意的に属格あるいは奪格で格標示する『誤用』を示す。その時期は、多くの言語で主節不定詞動詞と同時期に主語の格が『誤って』表れる時期とほぼ一致する。そしてそれは、大人と同じ動詞活用形がみられた後である。

(15) a. もこちゃん *の ギゅうにゅう *の ほしひだつてさ

(もこちゃんが牛乳が欲しいんだつてさ) (2;0)

b. わたし *に かたじゆけるから (わたしが片付けるから) (2;0)

この段階では、時制や補文標識に関する要素が表れる。紙面の関係で詳細は省くが、属格主語を大人の文法で許すインドに実存するドラヴィダ諸語の一部（たとえば Malayalam 語や Kannada 語）や、与格主語を許す大人の文法でスカンジナビア語などに見られる言語の特性と性質を一にすると考えることができる。

「(疑似) 主節不定詞」現象は世界の多くの幼児言語に共通に見られる『誤用』である。一段階目のそれは幼児特有の構造に因るが、二段階目のそれは、おそらくドラヴィダ諸言語やスカンジナビア言語の大人の文法に相当する。幼児は、ドラヴィダ言語やスカンジナビア言語のパラメータ値を試している段階にあると考えられる。

4. 「の」の過剰生成

4.1. 3種類の「の」の過剰生成

日本語を母語とする幼児の『誤用』のひとつに、本章の冒頭(1)でも示したような「の」の過剰生成がある。日本語を母語とする幼児が、1歳頃から4歳頃の間、(16)で示すような「の」の過剰生成をみせることは広く知られている。

(16) a. ほわし 大きい *の ほわし (=お箸) (2;1) (永野 1960)

b. まあるい *の うんち (2;0) (横山 1990)

- c. ゆうたが あしょんでる *の やちゅ は これ、これ。(ゆうた 2;3)

(16a)と(16b)は形容詞と名詞の間に「の」があらわれる例であり、2歳前後に観察される。(16c)は連体修飾節と名詞の間に「の」があらわれる例であるが、このような複合名詞句は、2歳から4歳の間に観察される。過剰生成された「の」の統語範疇については、長く言語獲得研究の分野で議論されてきた。

大人の文法では「の」には主に3種類あり、英語の'sに相当する属格の「の」、*one*に相当する代名詞の「の」、そして分裂文において前提節の主要部 *that* に相当する補文標識の「の」が存在する (Murasugi 1991)。

- (17) a. 山田の本（属格表示）
b. 赤いの（代名詞）
c. えみが初めてロブスターを食べたのはボストンでだ。（補文標識）

幼児が『誤る』不思議な「の」は何か。大人の文法に従って、日本語の第一言語獲得に関する研究史において、過剰生成の「の」が代名詞であるとする仮説、属格であるとする仮説、そして補文標識であるとする仮説が提案されてきた。

三つの仮説が乱立する根拠のひとつには、これらの仮説が依って立つ過剰生成の観察される記述（時期と特徴）が異なる点がある。過剰生成が観察される時期は長く、1歳から2歳（永野 1960 他）と観察する論文もあれば、4歳ですら見られる(Murasugi 1991 他)とする観察までである。この奇妙なほどに長い「の」の誤用について、Murasugi and Hashimoto (2004b), 村杉・中谷(2006)、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)においては、縦断的観察とコーパス分析を重ね、その結果、単一の現象に見える「の」の過剰生成が、実は三つの独立した原因によるものであるとする研究成果を発表した。本プロジェクトでは、「の」の過剰生成の問題を整理し再考を加えている。本節ではその研究成果を紹介する。

4.2. 補文標識仮説：関係節のパラメーター(Murasugi 1991)

Murasugi (1991)は、2歳から4歳の長期にわたる実験・観察的調査をもとに、過剰生成されている「の」は補文標識であるとする分析を提案し、過剰生成の原因は、世界の言語の連体修飾節構造の多様性にあると考えている。原理とパラメーター理論のもとに、連体修

飾節構造のパラメーターがあり、世界の言語には、補文標識をもつ連体修飾節の値を持つ言語と補文標識をもたない連体修飾節の値をもつがあると提案している。大人の文法において、英語などの多くの言語では補文標識をもつ連体修飾節（CP）が選ばれ、日本語や韓国語では補文標識をもたない連体修飾節（TP）が選ばれる。ところが、興味深いことに、後者の言語を母語とする 幼児は、日本語においても韓国語においても、補文標識を持つ連体修飾節（CP）を使い、自身の到達言語とは異なる連体修飾節を設定する段階がある。これが補文標識「の」が過剰生成される理由であると分析している。

複合名詞句が自然発話に観察され始めるのは2歳を過ぎてからである。多くの言語獲得現象がそうであるように、複合名詞句も最初は一定の表現でのみ表れ、その場合は、複合名詞句全体が「まとまり」として固定表現されているため、「の」の過剰生成は見られない (Murasugi and Hashimoto 2004b)。(18)の段階では動詞は常に「(買って)くれる」であり、名詞は「プレゼント」に限定されている。

- (18) a. とったんが 買ってくれた プレゼント だよ。(ゆうた 2;0)
 b. これ、ユキちゃんが くれた プレゼント なの。(ゆうた 2;0)

その後、連体修飾節が創造的に産出されるようになると、「の」の過剰生成が始まり、幼児によっては、遅くは4歳頃まで過剰生成を続ける。

- (19) a. 枯れてる *の 花 だよ。(ゆうた 2;2、屈折動詞+「の」+名詞)
 b. ゆうたがあしよんでる *の やちゅ は、これ、これ。
 (ゆうた 2;3、修飾節+「の」+名詞)
 c. これ 長い *の やちゅ だね。(ゆうた 2;3、形容詞+「の」+名詞)

Murasugi (1991)では、東京や長野において、「の」の過剰生成について実証的に調査した上で、富山方言と韓国語の大人の文法と幼児の獲得に関して分析し、この2歳から4歳頃まで連体修飾節に観察される「の」が、補文標識であると議論している。

富山方言の大人の文法では補文標識は「が」、属格は「の」であり、韓国語では補文標識は *kes*、属格は *uy* である。富山方言と韓国語の子供の発話を観察すると、過剰生成されているのは補文標識「が・kes」である事が分かる。

- (20) a. アンパンマン 付いとる *が コップ (富山方言、ケン2;11、Murasugi 1991)
b. Accessi otopai tha-nun *kes soli ya. (韓国語、2-3 years old、Kim1987)
uncle mortorcycle rinding-is KES soundis
'Lit. (This) is the sound that a man is riding a motorcycle.'

ここで過剰生成されている要素は属格ではありえない。属格は、富山方言では「の」、韓国語は「uy」であり、この時期の幼児が過剰生成しているのは、富山方言では「が」、韓国語では「kes」であるからである。

また、この要素が代名詞ではないことは、この段階の幼児は名詞的要素と名詞的要素の間に「大人と同様に」属格の『の』を挿入できていることから説明される。もし、この要素が代名詞であるのならば、「アンパンマン 付いとる *が」「Accessi otopai tha-nun *kes」は、名詞句となることが予測される。「コップ」、「soli」がそれぞれ名詞的な要素であることから、もしこの要素が代名詞ならば、たとえば、富山方言を母語とする幼児が発話すると予測される名詞句は、「アンパンマン 付いとる *が の コップ」となることが予測されるが、実際には幼児はそのようには産出しない。したがって、このとき幼児が過剰生成している要素は、代名詞ではなく、補文標識であると考えられる。その仮定にたてば、幼児は英語と(語順は異なるものの)同じ連体修飾節の構造を仮定していることになる。そのことは、世界の言語の(大人の文法における)連体修飾節には二種類あり、幼児が母語とは違う構造を仮定すると考えることにより、原理とパラメーター理論の下で、過剰生成された「の」が何かだけではなく、なぜ、幼児が「の」を過剰生成するのかという謎が説明されうる。

ところが、Murasugi (1991)の仮説では、説明しきれない記述が残されていることを、Murasugi and Hashimoto (2004b)は GLOW in Asia (韓国：ソウル)において発表している。それは、永野(1960)の観察を支持する記述が得られたことによる。永野(1960)の観察するように、いわゆる過剰生成の「の」は二語文の段階（1歳代）から見られ、この段階では属格もTやCに関連した要素も、発話には顕在化していない。この事実は、補文標識説だけでは過剰生成の「の」をすべて説明できないことを示す。Murasugi and Hashimoto (2004b)は、永野(1960)の代名詞仮説は基本的に正しく、過剰生成の「の」は補文標識である場合に加え、1歳から2歳のそれは、代名詞の「の」が表れていると論じている。

4.3. 代名詞仮説

永野 (1960)は、属格の「の」が2歳2ヶ月で表れ始める前に、(21)に示すように代名詞の「の」が表れ、同時に(22)に示すように過剰生成の「の」が観察されるとしている。

- (21) a. 大きい**の**。(2;1)
 b. ちっちゃい**の**。(2;1) (永野 1960)
- (22) a. ほわし 大きい ***の** ほわし (=お箸) (2;1)
 b. アムナちっちゃい ***の** アムナ (=ハルナ) (2;1) (永野 1960)

永野 (1960)によれば、この「の」の過剰生成が見られる時期には、「代名詞の「の」のみが産出されており、当該の幼児は、属格の「の」を挿入されるべき場所では、一切属格を挿入しない。この事実から、永野 (1960)は、この過剰生成の「の」は属格ではないと結論づける。

Murasugi and Hashimoto (2004b), 村杉・橋本(2006)は、永野(1960)と平行な発達段階が、橋本氏による観察により、日本語を母語とする「あつくん」にも見られることを報告し、永野(1960)の仮説が正しいことを示している。さらに、この代名詞仮説（ならびに補文標識仮説）は、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)において、中谷友美氏の行った「ゆうた」の縦断的観察においても裏付けられている。

中谷友美氏の観察による日本語を母語とする幼児「ゆうた」は、本プロジェクトのデータベース作成の対象となった幼児でもある。この「ゆうた」もまた、言語獲得初期の過剰生成の「の」と指示的名詞句の間に、しばしポーズ（間）をおいて、属格のない時期に同様の発話をしている。このポーズ（間）の実在性は、PRAATにより証明されている。

- (23) a. あつくん ちいちゃい **の** こんこんこん。(2;4)
 b. あつくん// (間)//ちいちゃい **の**// (間)// こんこんこん

(24)に示すように、この時期のゆうたの発話を PRAAT (Boersma and Weenink 2009)で分析すると、「の」とその後の指示的名詞の間に明らかなポーズ（間）がある事が分かる（図1）。

(24) 本、新しいの、本 だ。(1;10)

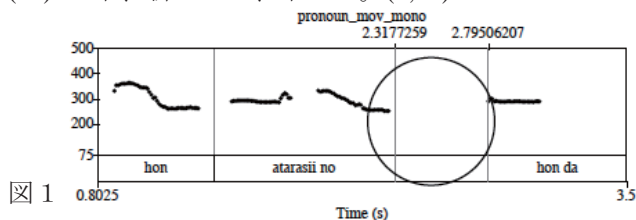


図 1

この結果は、この発話が2つの部分から成り立っている事を示しているものである。これは、2歳以降に観察されるいわゆる複合名詞句内でおきる「の」の過剰生成とは異なる性質をもつ。2歳以降で複合名詞句内の補文標識の「の」過剰生成の場合は、図2に示すように、このような「ポーズ（間）」は見られない。

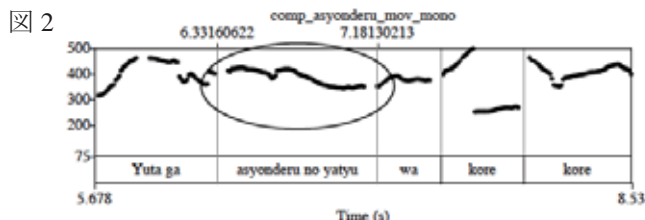


図 2

ではなぜ、代名詞「の」が表れたあとに、ポーズ(間)があるのだろうか。Murasugi and Hashimoto (2004), 村杉・橋本(2006), Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、1歳から2歳にかけてみられる代名詞の「の」は文法上の誤用ではなく、2語文の段階の子供の発話上(の限界)の特性を示す例であるとしている。この時期の子供はまだ修飾構造を完全に主要部と併合できないため、軽い名詞(代名詞「の」)を主要部にした名詞句をまず作って枠を作り、その後指示的名詞を発話する。この現象は併合操作(merger)を獲得する上で、意味的内容を持たない(軽い)代名詞の「の」と名詞句をまず併合する段階があることを顕在化する現象であるとしている。

4.4. 属格仮説

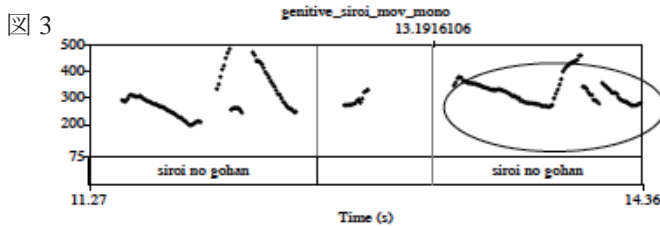
Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、1歳から2歳に見られる「の」は代名詞、2歳から4歳に見られる「の」は補文標識であるとする二つの仮説のみでは説明しきれない記述が残されていることを指摘する。それは、横山(1990)による観察が基本となる。

横山(1990)の指摘するとおり、大人と同様に、名詞的要素と名詞句の間に「の」が(正しく)挿入される段階において、特定の形容詞の後にのみ、過剰生成の「の」が観察され

る段階が存在する。たとえば「ゆうた」は1歳11ヶ月、野地氏による観察記録（「スマハレ」：CHILDES 収録）によれば2歳0ヶ月で、大人と同様に名詞的要素と名詞句との間に属格の「の」を挿入し、「お父さんの話」といった名詞句を使い始める。しかし同じ頃、特定の形容詞にのみ、「の」が挿入された名詞句が観察されるようになる。

- (25) a. 新しい*の 紙 (ゆうた 1;11)
 b. 白い*の ご飯 (ゆうた 2;0)
 c. 小さい*の ぶうぶう 通った よ。(スマハレ 1;11)

「ゆうた」の観察記録を PRAAT によって分析した結果、この場合、過剰生成の「の」と名詞句の間に、ポーズ（間）は見られない。



ここでは「白いのご飯」が一定の構成素として発話されていることから、上に示した代名詞の「の」の場合とは異なることは明らかである。また、この段階では子供はまだ複合名詞句を発話しておらず、分裂文も観察されないことから、この「の」が補文標識であるという可能性も考えにくい。

言語獲得研究史において、過剰生成の「の」が属格であるとする仮説は多くの研究者に提案されてきた。(岩渕、村石 1968, Harada 1980, 1984, Clancy 1985, 横山 1990, 伊藤 1998 他)その中で、横山 (1990)は、「の」の過剰生成は、色、大きさ、形、を言及する形容詞と共に表れるという不可思議な観察結果を報告している。ここでの観察は、Murasugi and Hashimoto (2004b)において、色、大きさ、形をあらわす形容詞は時制の屈折を伴わず、常に現在形であられるという記述と矛盾しない。

- (26) a. 大きい*の 魚 (1;8)
b. まあるい*の うんち(2;0)

さらに、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、中谷による縦断的観察（ゆうた）のデータと野地氏による観察記録（スミハレ：CHILDES 収録）のコーパス分析に基づき、横山(1990)によって報告された、一見したところ、不思議ともいえる観察結果は、裏付けられると報告している。すなわち、色、大きさ、形と言った特定の形容詞が使われる時のみ、この「の」の過剰生成が見られ、一方、「痛い」「重い」「怖い」などの形容詞は、時制を伴って叙述的にあらわれ、この段階では名詞の前には表れず、したがって、「の」の過剰生成を伴う事もない。

- (27) a. おいしい、これ。おいしい、これ。(ゆうた 1;10)
b. ここ ばばちい よね。(スミハレ 2;0)
c. お母ちゃん ぼんぼ(=胃) いたい の?(スミハレ 2;0)

これらの記述的一般化に基づき、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)は、なぜこのような奇妙な一般化がみられるのかを問う。そしてその答えの一つの可能性として、幼児が形容詞を大人とは異なる範疇でとらえている段階があると指摘している。色や形のような「『の』の過剰生成」をひきおこす形容詞は、実はいわゆる形容詞ではなく、名詞的要素（名詞的形容詞）であり、「『の』の過剰生成」をひきおこさない形容詞は、動詞的要素（動詞的形容詞）であると提案している。

この仮説は、以下の根拠により支持される。表1は「ゆうた」の発話、表2は「スミハレ」の発話を示すものであるが、ここに示すように、名詞的形容詞の過去形が極めて遅く表れるのに対し、動詞的形容詞の過去形は比較的早く表れる。

表 1: 形容詞の現在形、過去形があらわれ始めた年齢 (ゆうた)

名詞的形容詞 (触覚、視覚に関するもの)			動詞的形容詞		
形容詞	現在形	過去形	形容詞	現在形	過去形
大きい	大きい(1;8)	大きかった(2;0)	痛い	痛い(1;11)	痛かった(1;11)
小さい	小さい(1;11)	小さかった(2;1)	おいしい	おいしい(1;10)	おいしかった(1;10)
黒い	黒い(2;0)	黒かった(2;4)	怖い	怖い(1;10)	怖かった(2;2)

表 2: 形容詞の現在形、過去形があらわれ始めた年齢 (スミハレ)

名詞的形容詞 (触覚、視覚に関するもの)			動詞的形容詞		
形容詞	現在形	過去形	形容詞	現在形	過去形
大きい	大きい(1;11)	大きかった(2;9)	痛い	痛い(1;8)	痛かった(2;0)
赤い	赤い(1;11)	赤かった(4;0)	重い	重い(1;8)	重かった(2;2)
白い	白い(2;2)	白かった(3;6)	臭い	臭い(2;2)	臭かった(2;3)

この事実に基づき、幼児は、大人の形容詞とは異なり、形容詞を名詞的か動詞的かに分類していると考え、それは上記の記述のみならず、他の事実に対しても説明力をもつ。例えば、「の」の過剰生成を伴う名詞的形容詞は、指示的名詞としても(大人の文法とは異なり) 項の位置に表れる。

(28) a. *黄色い と *赤い と (スミハレ 2;9)

b. *小さい こおて(=買って)や (スミハレ 2;7)

(29) *ちっちゃいがあって、*まあるいがあって...こんな*大きいがあって... (ゆうた 2;2)

(28a)の形容詞「黄色い」「赤い」はそれぞれ「黄色いクレヨン」「赤いクレヨン」を意味し、(28b)の「小さい」は、実際は、小さい犬を指している。これらの名詞的形容詞は格をうけて表れ、また(29)においては、形容詞が主語位置に表れ、主格「が」が伴われている。

このような証拠に基づき、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)は、色、大きさ、形、状態の形容詞は名詞として分類される段階があり、過剰生成の「の」は、名詞として間違っ認識された形容詞に、(大人と同様に正しく)属格が付与された現象であるとして分析している。すなわち、横山 (1990)に観察された記述的一般化は、形容詞という範疇の獲得の困難さによるものであり、属格が過剰生成されている現象ではないと分析している。

ではなぜ、子供は特定の形容詞を名詞として認識するのか。色、大きさ、形を表す形容詞は他の情緒的、評価的な形容詞と異なり具体名詞に通ずる特徴を持っている (Berman 1988, Mints and Gleitman 2002)。また、de Villiers and de Villiers (1978)は、子供が大きさ、形、色を表す形容詞を一つのグループとして捉えていると論じている。更に、形容詞は「流動的範疇」とされ、習得が難しいとする論もある (Gassar and Smith 1998, Berman 1988, Polinsky 2005, 他)。

実際、日本語では、(30)にみるように形容詞も名詞も「です」の前に表れ、また(31)に示すように形容詞も動詞も時制を伴い活用することから、形容詞としての統語的手がかりが曖昧である。

- (30) a. 赤いです。（形容詞）
b. 赤です。（名詞）
- (31) a. 大きい-大きかった（形容詞）
b. 赤い-赤かった（形容詞）
c. 食べる-食べた（動詞）
d. 飲む-飲んだ（動詞）

これらの事実と分析は、形容詞は、その習得に時間がかかる範疇であることを示す。それは世界の言語の中の形容詞という範疇の多様性にも通ずるだろう。すなわち、幼児の文法獲得途上には、(大人のそれとは異なり)名詞のようにふるまう形容詞(名詞的形容詞)と動詞のようにふるまう形容詞(動詞的形容詞)が実在する。したがって名詞的形容詞と名詞句との間に、(大人の文法と同様に)属格を挿入する段階が存在することになり、それが「属格の『の』」仮説として提案されていた段階を説明するものであろう。⁶

60年に及んで議論されてきた「の」の過剰生成の問題は、記述のレベルにおいてすら矛盾を孕む混乱の中にあったといえるだろう。その問題の根幹には、この過剰生成の「の」が単独の現象と信じられていたことにもある。また過剰生成されている「の」が何かという問いに焦点があてられ、「の」の過剰生成がなぜおきるのかが問われない傾向にあったこ

⁶ Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、この3つの要因が「『の』の過剰生成」にあるとする結論は、複数のコーパス分析により、更に裏付けている。

とも、混乱の原因の一端であったといえるだろう。

本節では過剰生成の「の」は、(i)代名詞の「の」(1歳後半)、(ii)属格の「の」(2歳前後)、(iii)補文標識の「の」(2歳から4歳)、の3つの段階を含むと提案し、過去60年に言語獲得史の中で提案されてきた3つの仮説が、基本的にすべて正しい可能性を示した。言語理論上「過剰生成」と言えるのは、連体修飾節の構造のパラメーターの設定により過剰生成される補文標識の「の」の場合のみである。他の「の」は、併合操作の獲得過程、ならびに形容詞の統語範疇の獲得に起因し、代名詞の「の」、ならびに属格の「の」はそれぞれ大人のそれと齟齬がないものと考えられる。

本節で概観した幼児が見せる『誤用』もまた、言語の本質を理解するために、日本語だからこそ見える重要な鍵となるだろう。生成文法理論(言語理論)の下で「なぜ」を問い、世界の言語を射程に入れて一定の基準のもとで比較検討するとき、人の心に実在する文法の重要な特性を、日本語は見せてくれる。

5. 結びにかえて：自然科学としての『幼児の誤用』

幼児は無意識に普遍文法の道を進む。

言語獲得研究において、普遍文法の特徴が早期から獲得されていることが実証的に示されていることは、前章のかき混ぜや移動にかかる制約に関する紹介においても述べた。

本プロジェクトにおいては、日本語の項削除についても理論的実証的な研究を行っている。本成果報告書において斎藤氏と高橋氏が大人の体系について研究を行うように、項削除は東アジア言語の独特な特徴であり、それは、項削除以外のどのような言語現象と関連する特徴であるかが理論的実証的に進められつつある。空の項の先行詞が照応形を含む場合、厳密同一読み(strict-identity interpretation)と緩い同一読み(sloppy-identity interpretation)が見られ、(38b)は多義的になる。

- (38) a. ジョンが自分のコンピューターを壊した。
 b. メアリーも *e* 壊した。

(*e* = ジョンのコンピューター、メアリーのコンピューター)

この緩い同一読みは代名詞(それ)を使った文では見られない。

(39) a. ジョンが 自分のコンピューターを 壊した。

b. メアリーもそれを 壊した。

（それ = ジョンのコンピューター、#メアリーのコンピューター）

ここから、(38)の空目的語は代名詞 *pro* ではなく、項(DP)の削除によるものと考えられるが、幼児の自然発話においても、項削除と思われる例は、動詞が活用をはじめ、かき混ぜ文が表れる 2 歳前半という早期に観察される。(40a) は、スミハレがパンツを一人で履くとき、(40b) は、レモン水をいれているとき、父親が「お母ちゃんのは？」と聞いて、スミハレが母親に向かって産出したとき、(40c) は、母親に抱かれている弟について、「またおっぱい飲んだ？」と聞かれたとき、(40d) は、母が弟のおかゆをたこうとして母親が「お粥たこうね」というのを聞いて、それぞれスミハレが発話した例である。

(40) a. ぼくもひとり はく (2;01)

b. おかあちゃんも のむ？(2;03)

c. また ぼくものむよ (2;04)

d. ぼくもちょうだいね (2;05)

更に、杉崎氏は、本プロジェクトの英語による成果報告書の中で、この項削除のもつ統語的特徴についても幼児が観察しうる早い時期に獲得していることを実験的に示している。

このように、言語獲得研究において、普遍文法の特徴が早期から獲得されていることが示される一方で、幼児の文法的な『誤用』は、普遍文法の制限の範囲内で起こりうることも明らかにされつつある。母語のパラメーターの値は、総じて早期に決定されるとは限らない。人間は、あらゆる言語の話者になりうるメカニズムを持って生まれ出ずるがゆえに、自身の母語に不必要な特性を「捨てる」過程も経うる。言語獲得の中間段階に、普遍文法に基づき母語とは異なる自然言語に許された文法値を仮定する段階があるすれば、言語は学習や経験、構文パターンの推論のみにより習得されるのではない。そのとき、幼児は、世界の言語にある共通性と多様性を規定する生得的な抽象的なシステムと、言語環境にある母語の特性とを結びつけている段階にあるといえよう。本稿では、主節不定詞現象や動詞の自動詞・他動詞の『誤った』交替などの日本語を母語とする幼児に観察される典型的な誤用をとり上げ、これらの文法的誤用が、単なる『間違い』ではなく、自然言語に存在す

る普遍文法の範囲内で規定された（母語以外の）文法の特徴が表れる段階とする分析を提案した。

このように考えると、幼児が母語を獲得するとは、すなわち、成長の過程で、母語の特徴が具体的になんであるのかを決定するプロセスを意味する。Chomsky (1981)の枠組みで捉えなおせば、母語獲得とは、母語のパラメーターの値がなんであるかを、世界の言語で許されるいくつかの値の可能性の中から選択することである。母語の値が当該のパラメーターのデフォルト値でないとき、あるいは有標なものであるとき、その選択には時間がかかる。そのために、現実の言語獲得は、瞬時的ではなく、時間がかかると考えられる。

20世紀前半、科学者である中谷宇吉郎は、雪の結晶には多様な形状があることに注目し、それがいかなる気象条件のときにできるのかという視点から、気象条件と雪の結晶が形成される過程の関係を解明した。彼は、『雪』（岩波文庫）の中で、以下のように述べている。「さて、雪は高層において、まず中心部が出来それが地表まで降って来る間、各層においてそれぞれ異なる生長をして、複雑な形になって、地表へ達すると考えねばならない。それで雪の結晶形及び模様が如何なる条件で出来たかということがわかれば、結晶の顕微鏡写真を見れば、上層から地表までの大気の構造を知ることが出来るはずである。そのためには雪の結晶を人工的に作って見て、天然に見られる雪の全種類を作ることが出来れば、その実験室内の測定値から、今度は逆にその形の雪が降った時の上層の気象の状態を類推することが出来るはずである。このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれているのである。その暗号を読みとく仕事が即ち人工雪の研究であるということも出来るのである。」

雪の結晶に多様な形状があるように、世界の言語にも多様性がある。その多様性もまた、人間言語に潜む原理的なメカニズムによって生じている。⁷ この科学者の言葉を借りるとすれば、言語学は自然科学であり、『幼児の誤用』もまた、天から送られた手紙であるということもできよう。手紙にある文章は、当該の幼児の「母語」である文法とは異なる文法に基づいて書かれている。その文法を読み解く仕事が、すなわち、人間言語の多様性のルーツを研究するという事もできるだろう。

⁷ 本稿で引用する中谷宇吉郎の著作と自然科学者としての優れた知見、そして言語科学との関連については、北原久嗣氏の南山大学大学院人間文化研究科の集中講義（2012年9月12日）にてご教示いただいた。ここに、記して感謝する。

参考文献

- Berman, Ruth (1988) “Word Class Distinctions in Developing Grammar.” In Yonata Levy, I. Schlesinger, and Martin D. S. Braine, eds., *Categories and Processes in Language Acquisition*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 45–72.
- Boersma, Paul and David Weenink (2009) Praat: Doing Phonetics by Computer (Version 5.1.23) [Computer Program], Retrieved October 31, 2009, from <http://www.praat.org/>
- Bowerman, Melissa (1974) “Learning the Structure of Causative Verbs: A Study in the Relationship of Cognitive, Semantic, and Syntactic Development.” *Papers and Report on Child Language Development* 8. 142-178.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris: Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Clancy, Patricia (1985) “The Acquisition of Japanese.” In Dan Isaac Slobin, ed., *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition Volume 1: The Data*, Erlbaum, Hillsdale, N.J., 373–524.
- de Villiers, Jill G. and Peter A. de Villiers (1978) *Language Acquisition*, Harvard University Press, Cambridge, Mass.
- Figueira, Rosa Attié (1984) “On the Development of the Expression of Causativity: A Syntactic Hypothesis.” *Journal of Child Language* 11. 109-127.
- Gasser, Michael and Linda B. Smith (1998) “Learning Noun and Adjective Meanings: A Connectionist Account,” *Language and Cognitive Processes Special Issue: Language Acquisition and Connectionism* 13, 269–306.
- Guasti, Maria Teresa (1993/1994) “Verb Syntax in Italian Child Grammar: Finite and Non-finite Forms.” *Language Acquisition* 3(1), 1-40.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (1993) “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations.” In Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honour of Sylvain Bromberger*. Cambridge, MA: MIT Press, 53-109.
- Harada, Kazuko (1980) “Notes on the Acquisition of the Genitive Case Particle No,” ms. University of New Mexico, Albuquerque.

- Harada, Kazuko (1984) "On the Acquisition of Japanese," 『金城学院大学論集、英米文学編』 25, 149–171.
- Hoekstra, Teun and Nina Hyams (1999) "The Eventivity Constraint and Modal Reference Effect in Root Infinitives." Proceedings of BUCLD 23. Cascadilla Press, 240-252.
- Kim, Young-Joo (1987) The Acquisition of Relative Clauses in English and Korean: Development in Spontaneous Production, Ph.D. dissertation, Harvard University.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction." *Linguistic Inquiry* 19. 335-391.
- Mintz, Toben H. and Lila R. Gleitman (2002) "Adjectives Really Do Modify Nouns: The Incremental and Restricted Nature of Early Adjective Acquisition," *Cognition* 84, 267–293.
- Murasugi, Keiko (1991) Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Murasugi, Keiko (2009a) "What Japanese-speaking Children's Errors Tell Us about Syntax," Paper presented at the Asian GLOW VII, English and Foreign Languages University, Hyderabad, India, February 28.
- Murasugi, Keiko (2009b) "The Onset of Complex NPs in Child Production." In Hiroki Maezawa and Azusa Yokogoshi, eds., Proceedings of the 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL6), MIT Working Papers in Linguistics 61, 47–78.
- Murasugi, Keiko (2012) "Children's 'Erroneous' Intransitives, Transitives, and Causatives and the Implications for Syntactic Theory." Paper presented at NINJAL International Symposium: Valency Classes and Alternations in Japanese. NINJAL. August 4.
- Murasugi, Keiko (2013) "Mimetics and Onomatopoeia as Japanese Root Infinitive Analogues." *Grammar of Mimetics*, SOAS, University of London, London, GB. 2013年5月11日.
- Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009) "Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head-movement." *BUCLD 33 Proceedings Supplement*. Cascadilla Press.
- Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2007) "What's Acquired Later in an Agglutinative Language." Paper presented at the Asian GLOW VI, Chinese University of Hong Kong. December 27.
- Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2010) "What's Acquired Later in an Agglutinative Language." *Nanzan Linguistics* 6. 47-78.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004a) "Three Pieces of Acquisition Evidence for the

- v-VP Frame.” *Nanzan Linguistics* 1. Nanzan University. 1-19.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004b) “Two Different Types of Overgeneration of ‘no’ in Japanese Noun Phrases,” in Hang-Jin Yoon, ed., *Proceedings of the 4th Asian GLOW in Seoul*, Hankook, Seoul, 327–349.
- Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto, and Chisato Fuji (2007) “VP-Shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives,” *Linguistics* 45, 615-651.
- Murasugi, Keiko and Tomomi Nakatani (2011) "Three types of 'Root Infinitives': Theoretical implications from Child Japanese" Paper presented at 20th Japanese/Korean Linguistics Conference. Oxford University. October 1.
- Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) “A Trihedral Approach to the Overgeneration of No in the Acquisition of Japanese Noun Phrase,” paper presented at the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawaii, November 12–14.
- Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani, and Chisato Fuji (2010) “The Roots of the Root Infinitives” *BUCLD 34 Proceedings Supplement*. Cascadilla Press.
- Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2009) “Case Errors in Child Japanese and the Implications.” *Proceedings of the 3rd GALANA*, 143-164. Cascadilla Press.
- Polinsky, Maria (2005) “Word Class Distinctions in an Incomplete Grammar.” In Dorit D. Ravid and Hava Bat-Zeev Shyldkrodt, eds., *Perspectives on Language and Language Development*, Kluwer, Dordrecht, 419–436.
- Radford, Andrew (1998) “Genitive Subject in Child English [Electric version],” *Lingua* 106, 113-131.
- Rizzi, Luigi (1993/1994) “Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: the Case of Root Infinitives.” *Language Acquisition* 3. 371-393.
- Sano, Tetsuya (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*. Ph.D. dissertation, UCLA.
- Sawada, Naoko and Keiko Murasugi (2011) “A Cross-linguistic Approach to the ‘Erroneous’ Genitive Subjects: Underspecification of Tense in Child Grammar Revisited.” *Selected Proceedings of the 4th GALANA*, 209-226. Cascadilla Press.
- Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) “A Theoretical Account for the

- ‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense.” *BUCLD 34 Proceedings supplement*. Cascadilla Press.
- Schütze, Carlson and Kenneth Wexler (1996) “Subject Case Licensing and English Root Infinitives.” *BUCLD 20*, 670-681, Cascadilla Press.
- Wexler, Kenneth (1998) “Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint: A New Explanation of the Optional Infinitive Stage.” *Lingua* 106, 23-79.
- 伊藤友彦 (1998) 「過剰生成される「ノ」の統語カテゴリー：幼児一例の縦断研究」『東京学芸大学紀要第一部門教育科学』49, 143-149.
- 岩渕悦太郎、村石昭三 (1968) 「言葉の習得」岩渕悦太郎、波多野完治、内藤寿七郎、切替一郎・時実利彦・沢島政行・村石昭三・滝沢武久著 『言葉の誕生：産声から五歳まで』日本放送出版協会、東京、109-177.
- 大津由紀雄 (2002) 「言語の獲得」大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則編『言語研究入門』研究社, 179-191.
- 鈴木精一 (1987) 「幼児の文法能力」福沢周亮編『子どもの言語心理 (2) 幼児のことば』大日本図書, 141-180.
- 中谷宇吉郎 (1994) 『雪』岩波書店.
- 永野賢 (1960) 「幼児の言語発達—とくに助詞の「の」の習得過程について」関西大学国文学会、『島田教授古希記念国文学論集』405-418.
- 野地潤家 (1973-77) 『幼児言語の生活の実態 I~IV』文化評論出版. 東京.
- 村杉恵子 (印刷中) 「幼児の『誤用』はなぜ生じるのか：幼児の言語獲得における普遍文法の役割」『日本語文法』第13巻2号、くろしお出版.
- 村杉恵子、橋本知子 (2006) 「言語獲得における名詞句内での過剰生成」*KSL 26*、関西言語学会、12-21.
- 横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」『発達心理学研究』1, 2-9.

大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所
理論・構造研究系 領域指定型プロジェクト

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究

Linguistic Variations within the Confines of Language Faculty: Studies in the Acquisition of Japanese and Parametric Syntax

発行日	2013年9月
編集・発行	南山大学 村杉恵子 (プロジェクトリーダー)

